

第2章 宇陀市の維持・向上 すべき歴史的風致

歴史まちづくり法において「歴史的風致」とは、「地域における固有の伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史的価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義されている。

当市は、古代から中央政権と深い関わりを持ち、京・大阪や紀州方面と伊勢方面を結ぶ交通の要衝地であった。支配者層から庶民に至るまで、聖地巡礼や参勤交代等、様々な目的を背景に人・物・情報が往来して発展を遂げる一方で、地域では農業のほか葛の生産や薬草の栽培等、環境に応じた産業が根付き、人々の暮らしを支えてきた。古代・中近世・近代と、各時代の特色が重層的に残る豊かな環境のなかで、昔ながらの暮らしの作法や伝統行事が今も息づいており、当市の歴史的風致を形成している。

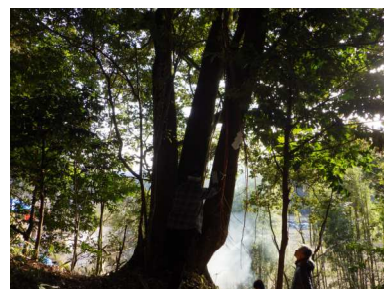
当市におけるこれらの維持・向上すべき歴史的風致は、記紀・万葉の名跡や伊勢街道沿いの旧集落に残る「巡礼にまつわる歴史的風致」、おもに寺院や神社等で展開される「信仰にまつわる歴史的風致」、当市の自然環境に応じて展開されている「生業にまつわる歴史的風致」と、近世より宇陀郡の中心地として栄えた町場にまつわる「宇陀松山の水路と商いゆかりの行事にみる歴史的風致」と、以下の通り大きく4つに分類された8つの歴史的風致を設定した。



巡礼にまつわる歴史的風致
(榛原山辺三 赤人会式)



信仰にまつわる歴史的風致
(菟田野古市場 太鼓台巡行)



生業にまつわる歴史的風致
(室生小原 山の神)



町場にまつわる歴史的風致
(大宇陀万六 寒施行)

1. 記紀・万葉ゆかりの地の営みにみる歴史的風致

コラム1
壁画「阿騎野の朝」

2. 伊勢街道の旧宿場町の営みにみる歴史的風致

2-1 伊勢街道の分岐点、萩原の年中行事にまつわる歴史的風致

2-2 本街道沿いの集落の営みにみる歴史的風致

2-3 あお越え道沿いの集落の営みにみる歴史的風致

3. 宇太水分神社の祭礼行事にみる歴史的風致

コラム 2
伊勢湾台風からの復興

4. 室生寺周辺の行事にみる歴史的風致

コラム 3
宇陀市内の地藏盆

5. 宇陀市の民俗芸能にみる歴史的風致

5-1 大野のいさめ踊りにまつわる歴史的風致

5-2 宇陀市の盆踊りにまつわる歴史的風致

5-3 宇陀市の獅子舞にまつわる歴史的風致

コラム 4
阿紀神社の神事能

6. 宇陀の田畑と山林にまつわる祭礼行事ゆかりの歴史的風致

6-1 宇陀の稲作にまつわる祭礼行事ゆかりの歴史的風致

6-2 黒大豆の生産にまつわる祭礼行事ゆかりの歴史的風致

6-3 宇陀の山の営みにみる祭礼行事ゆかりの歴史的風致

コラム 5
フクマルと、とんど(どんと)

コラム 6
庚申さん

コラム 7
ダリアの生産

7. 薬草の生産と活用まつわる歴史的風致

7-1 薬草を活かした暮らしにまつわる歴史的風致

7-2 本葛の製造販売にまつわる歴史的風致

7-3 大和茶の生産にまつわる歴史的風致

コラム 8
大和当帰の栽培

コラム 9
森野旧薬園

8. 宇陀松山の水路と商いゆかりの行事にみる歴史的風致

8-1 各大字の参会にまつわる歴史的風致

8-2 前川とその周辺に残る水路にまつわる歴史的風致

8-3 施行にまつわる歴史的風致

8-4 宇陀の初市にまつわる歴史的風致

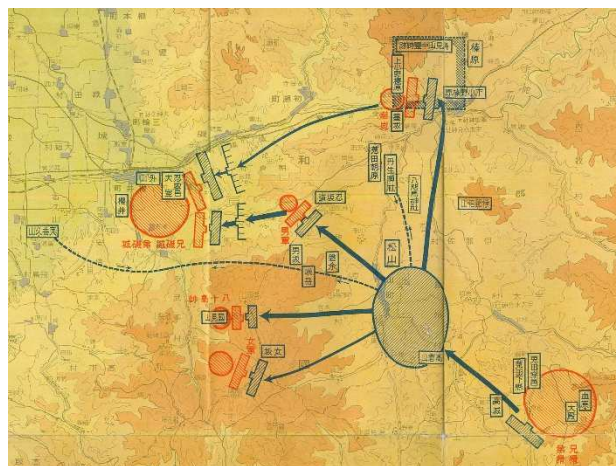
コラム 10
水のわかれと氏子域

1. 記紀・万葉ゆかりの地の営みにみる歴史的風致

(1) はじめに

日本最古の書物『古事記』¹⁴や、最初に作られた勅撰^{ちよくせん}（天皇の命令により編纂された）の歴史書『日本書紀』¹⁵、これらをまとめて「記紀」と呼ぶ。「記紀」には「宇陀血原」「宇陀墨坂」など、宇陀の地が数多く登場する。同様に、現存する日本最古の歌集『万葉集』でも、宇陀の地名が歌われているものや、宇陀の地で歌われたとされるものがある。その代表的な歌が柿本人麻呂の「東の野にかぎろひの立つ見へて返り見すれば月傾きぬ」である。「記紀」『万葉集』に関連する顕彰碑・歌碑などの分布は次頁の通りである。また、関連する地名をまとめると63頁の表のとおりとなる。

宇陀市内には、記紀・万葉ゆかりの地の顕彰活動が盛んにおこなわれた昭和15年（1940）前後に建てられた数々の石碑や、万葉歌碑、記紀・万葉に登場した地や人物にちなんだ活動が今も残っている。これにまつわる建造物と活動について紹介する。

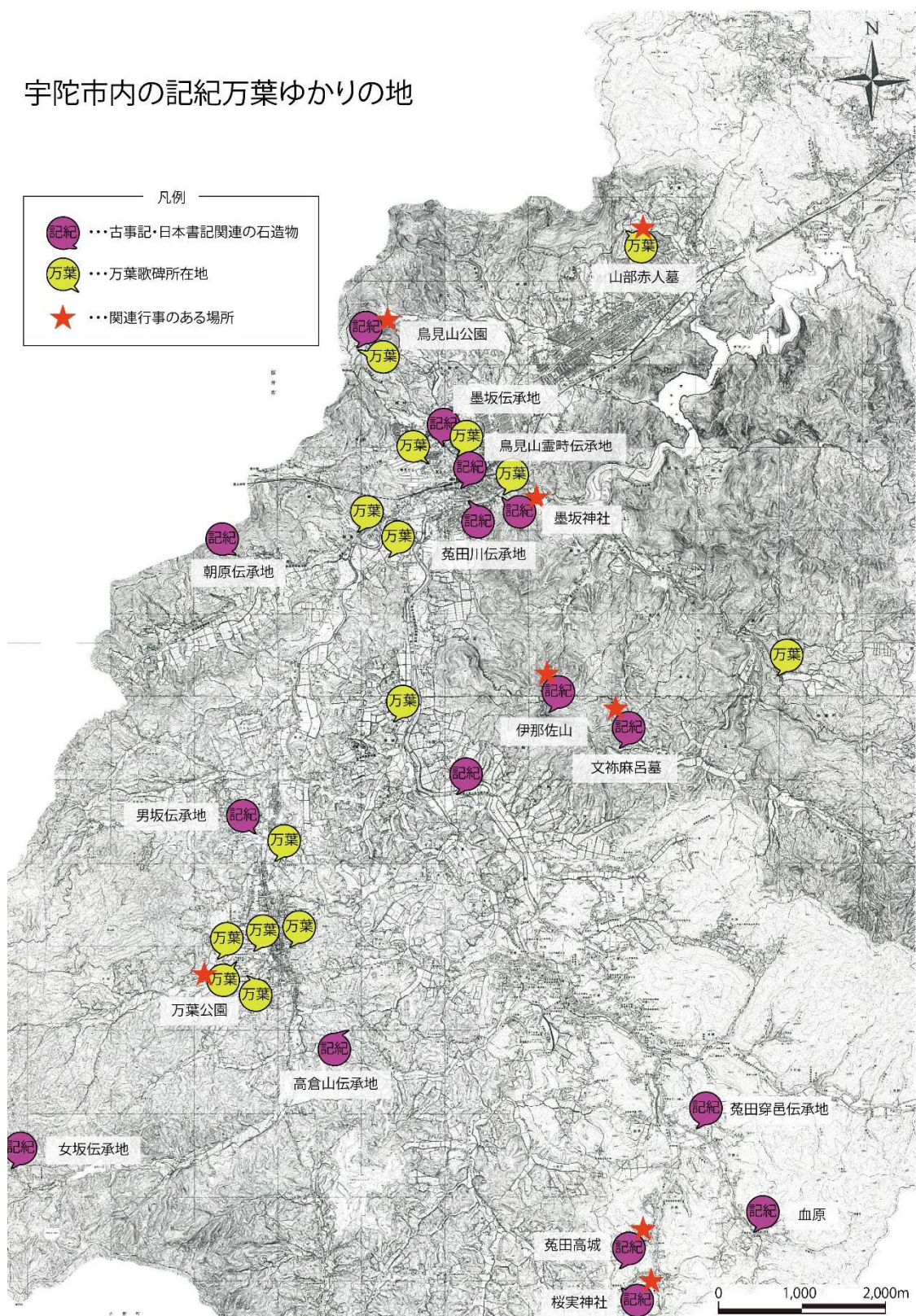


地図付きガイドブック『大和宇陀神武天皇御聖蹟』(昭和11年(1936)金沢藤七 著)(個人蔵)
表紙(左)と地図抜粋(右)

¹⁴ 『古事記』は現存する最古の書物である。天武天皇が「帝紀（皇室の記録）」と「旧辞（神話・伝承・歌謡）」を研究して、正しいことを後世に伝えるよう命じ、編さん事業が始まったと『古事記』に記されている。稗田阿礼が語り伝えたものを太安万侶がまとめ、和銅5年（712）に完成した。3巻構成で、上巻は天地のはじめから天孫降臨前後の神々の物語、中巻は神武天皇から応神天皇までの英雄伝説、下巻は仁徳天皇から推古天皇までの物語である。

¹⁵ 『日本書紀』は最初の勅撰の歴史書である。養老4年（720）に完成した。天武天皇が、「帝紀」と「上古諸事」の史実を確定して記録するよう命じた事に始まる。

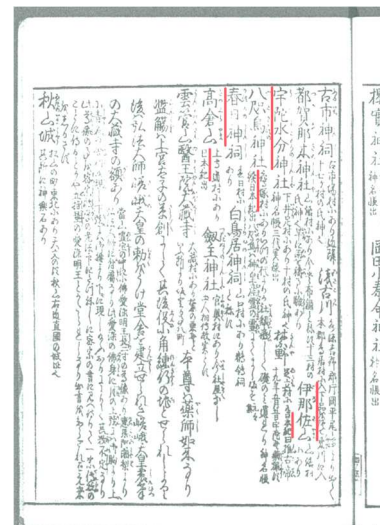
宇陀市内の記紀万葉ゆかりの地



番号	地名等	記載	推定される所在地	備考
1	うだのちはら 宇陀血原	古事記 神武天皇記	宇陀市菟田野宇賀志	兄宇迦斯の遺体から流れた血で赤く染まった場所にちなんで血原と呼んだ
2	うだのたかき 宇陀能高城	古事記 神武天皇記	宇陀市菟田野佐倉	神武天皇が弟宇迦斯が献した宴で披露した歌の歌詞に登場する。
3	いなさのやま 伊那佐山	古事記 神武天皇記	宇陀市榛原山路	兄師木、弟師木を撃ち、疲れた軍を慰めるため謡った歌詞に登場
4	うだのすみさか 宇陀墨坂	古事記 崇神天皇記	宇陀市榛原萩原	宇陀の墨坂神に赤色の楯矛を祭り、大阪神に墨色の楯矛を祭り、疫病退散の祈願をした
5	うだのしむつり 菟田下県	日本書紀 神武天皇即位前紀	宇陀市菟田野宇賀志	菟田穿邑をさす、とある。
6	うだのちはら 菟田血原	日本書紀 神武天皇即位前紀	宇陀市菟田野宇賀志	兄猾の遺体から流れた血で赤く染まった場所にちなんで血原と呼んだ
7	うだのうかぬ 菟田穿邑	日本書紀 神武天皇即位前紀	宇陀市菟田野宇賀志	吉野から菟田穿邑へ至った
8	うだのたかくらやま 菟田高倉山	日本書紀 神武天皇即位前紀	宇陀市大宇陀大東	八十梟師との闘いにおいて高倉山の頂から全体を見渡し差配した
9	墨坂	日本書紀 神武天皇即位前紀	宇陀市榛原榛原	兄磯城等との闘いにおいて、女軍を墨坂に配し迎え撃った
10	とみのやま 鳥見山	日本書紀 神武天皇紀	宇陀市榛原萩原	神武天皇4年2月23日に皇祖天神を鳥見山の霊時に祭った
11	すみさかのみ 墨坂神	日本書紀 崇神天皇紀	宇陀市榛原萩原	崇神天皇9年3月15日に赤盾8枚・赤鉾8竿をもって墨坂神を、黒盾8枚・黒鉾8竿をもって大阪神を祀れと神託を受け、病氣平癒を祈願した
12	うだ 菟田	日本書紀 雄略天皇紀		冬十月に鳥官の禽、菟田の人の狗に噛まれて死ぬ。天皇嘆る。
13	うだのこほり 菟田郡	日本書紀 皇極天皇紀		菟田郡の菟田山にて見つけた芝草（しそう）という紫の菌（たけ）を食した人が健康長寿を得たという噂話を聞いた
14	おほの 大野	日本書紀 天武天皇紀上	宇陀市室生大野	天武天皇元年6月24日、東国へ行く途中に經由する。
15	うだのあき 菟田吾城	日本書紀 天武天皇紀下	宇陀市大宇陀迫間	天武天皇9年3月23日に行幸
16	やたがらすのやしろ 八咫烏社	続日本紀	宇陀市榛原高塚	文武天皇慶雲2年9月、八咫烏社を大倭国宇太郡に置き祭る
17	なむさかごう 波坂郷	続日本紀 元明天皇	宇陀市榛原八滝・内牧か	和銅6年7月宇太郡波坂郷の人、銅鐸を長岡野の地に得て献る。
18	すみさか 墨坂	万葉集	宇陀市榛原萩原	君が家に 我が住坂の 家道をも 我は忘れじ 命しなずは
19	やそくまさか 八十隅坂	万葉集	宇陀市榛原萩原か？ (墨坂?)	百足らず 八十隅坂に 手向けせば 過ぎにし人に けだし逢はむかも
20	うだのの 宇陀乃野	万葉集		宇陀乃野の 秋萩しのぎ 鳴く鹿も 妻に恋ふらく 我にはまさじ
21	おほの 宇陀乃大野	万葉集	宇陀市室生大野	けころをも 時かたまけて 出でましし 宇陀乃大野は 思ほえむかも
22	まはに 宇陀乃真赤土	万葉集		山跡の 宇陀乃真赤土の さ丹つかば そこもか人の 我を言なさむ
23	あきの 安騎野	万葉集	宇陀市大宇陀迫間	輕皇子、安騎野に宿る時に 柿本朝臣人麻呂の作る歌
24	むらふ 室原	万葉集	宇陀市室生	日本の 室原の毛桃 本繁く 言ひてしものを 成らずば止まじ

宇陀市における記紀・万葉ゆかりの地（『大和古代地名辞典』（1998年1月/日本地名学研究所編）より）

『古事記』『日本書紀』が編纂された目的は、『^{てい}帝紀』(天皇や皇室の系譜をまとめたもの)と『^き旧辞』(「記紀」以前に存在したとされる日本の歴史書のひとつ)の伝承であった。「記紀」の完成から約千年後には、旅行先のひとつとして、これらの歴史に縁のある土地を訪ね歩いていたようだ。『大和名所図会』(秋里舜福 著/竹原信繁 画/寛政3年(1791))、4巻に宇陀の見どころが盛り込まれている。主に『^{えんぎ}延喜式神名帳』(延長5年(927))に記載のある神社や室生寺などの名刹とともに、血原、高倉山など「記紀」にある地名がいくつも登場する。



大和名所図会
(奈良県図書情報館蔵)

物見遊山の行先として捉えられていた記紀ゆかりの地も、昭和3年(1928)の金融恐慌と翌年の大恐慌の時期に社会運動が激化し、国体の擁護が叫ばれるようになると、「神武陵のある建国の聖地」大和が強調される動きから『古事記』『日本書紀』の神話が重要視されるようになり、神話に登場する地名はどこかと探索する動きが大きくなった。いわゆる「^{せいせきけん}聖蹟顕彰運動」である。

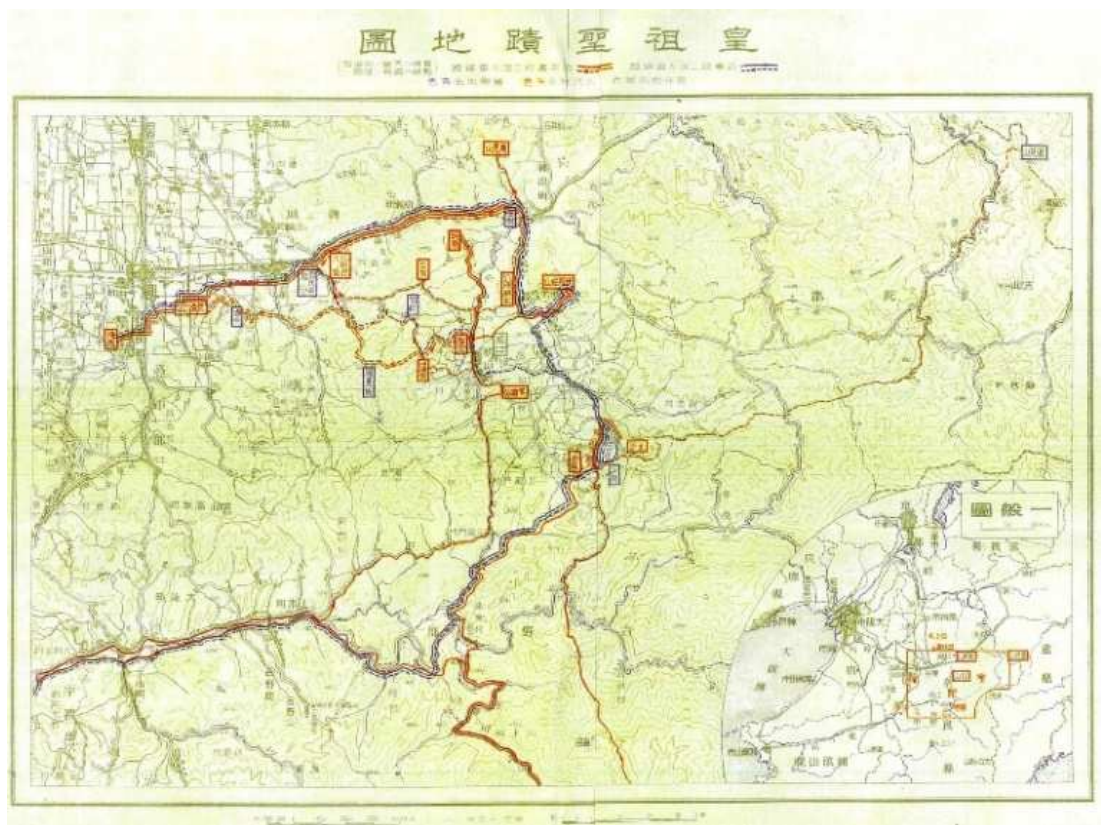
この運動は、代議士や首長等、地域の有力者が中心となり行われた。皇祖聖蹟地図は、昭和7年(1932)11月に天皇陛下御臨席のもと軍事演習が奈良県・大阪府にて行われた際に献納するために、宇陀郡町村会で制作されたものである(右写真の解説より)。次頁の地図に描かれた青線が『古事記』による進路、赤線が『日本書紀』による進路を示し、神武天皇ゆかりの地名が赤文字、敵軍(兄^{えうかし}猾、八十梟^{やそたける}帥、兄磯^{えしき}城)ゆかりの地名が青文字で記入されている。なお、これらの場所は、いずれも当時の宇陀郡が皇祖聖蹟の所在地であると主張していた場所である。

皇祖聖蹟解説

昭和七年秋十一月、大和河内両平野に於いて、御舉行あらせられし特別大演習に、聖駕を奉迎するを得るは、我奈良縣民の齊しく光榮とする所なり、此の機に際し、宇陀郡町村長會は、當郡内に散在せる皇祖の聖蹟を謹寫し、其の獻納方を願出するに、畏くも御賜納遊はされたるは、郡民の衷心欣幸とする所なり。

謹へて本帖に收めたる聖蹟を國史によつて一覽せしめんが、皇祖神武天皇は、宏遠なる御理想の下に、日向高千穂の宮を發し給ひ、紀伊荒坂津より、高山峻岳を跋涉して宇

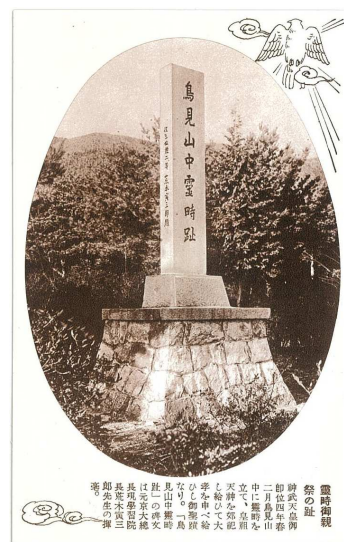
皇祖聖蹟解説(昭和7年(1932) 奈良県宇陀郡町村会 制作)



皇祖聖蹟地図（昭和 7 年（1932）奈良県宇陀郡町村会 制作）

この運動が活発化した結果、「記紀」に登場する地名をどこにするかで争いが起こるようになり、鳥見山^{れいじ}霊時¹⁶は桜井と榛原で本家争いが繰り広げられたほか、生駒郡富雄村、南生駒村小平尾、丹波市町滝本、新沢村一なども名乗りを上げた。

そこで県社寺課は神武聖蹟調査を行い、伝説地は洩れなく取入れて 55 箇所を挙げたが、これにより各地の聖蹟争いが激化した。次に昭和 13 年（1938）12 月、文部省により神武天皇聖蹟調査委員会が組織され、政府の手により「聖蹟」が決定された。その結果が次頁の表で、全国で 19 箇所（うち奈良県は 7 箇所）が「神武天皇聖蹟」に選定され、記念碑が建てられた。また、県や町村でも縁^{ゆかり}の地に石碑など



鳥見山霊時趾を PR するための絵葉書（昭和初期）（墨坂神社蔵）

¹⁶ 『日本書紀』神武天皇 4 年条に「乃ち^{すなわ} 霊^{まつり} 時^のを鳥見山の中に立てて、其地を号けて、上小野、下小野の榛原と曰ふ。用て皇祖天神を祭りたまふ」とある。神武天皇が即位後に鳥見山で祭祀を行ったとの記述で、権威ある学識者の揮毫をしたための石碑の建設や聖蹟地図の出版をしたほか、国会議員や首長までが乗り出して議場で論戦を交わすなど、熾烈な争いが繰り広げられた末、桜井市が伝承地に選定された。

を建て皇紀 2600 年事業を盛り上げた。

宇陀市内では、国に選定された聖蹟として「菟田^{うだ}穿^{のうがちむら}邑^め（菟田野宇賀志）」「菟田高倉山伝説地（大宇陀守道）」の 2 箇所に顕彰碑があるほか、奈良県の事業として建てた石碑「男坂^{おさか}伝承地」「女坂^{めさか}伝承地」「墨坂^{すみさか}伝承地」「菟田川^{うだのあさはら}伝承地」「菟田朝原^{うだのあさはら}伝承地」が残っている。町村の事業でも、伝承地へ向かう道の途中に石の道標を建てている。また、選定されなかったが、地元有志による聖蹟顕彰運動の中で建てられた石碑もある。（鳥見山公園、榛原駅前等）

決定された「神武天皇聖蹟」奈良県分一覧

決定された「神武天皇聖蹟」

「聖蹟」名	決定された地域・地点	否定または根拠なしとされた地域・地点
1 丹生川上	吉野郡小川村	吉野郡川上村・丹生村長谷など 4 ヶ所
2 菟田高倉山	宇陀郡政始村・神戸村（高倉山山頂）	宇陀郡榛原町・内牧村、吉野郡高見村・竜門村
3 榎原宮	高市郡萩原町	なし
4 鷺邑	おおよそ生駒郡北倭村・富雄村にわたる地方	磯城郡城島村外山
5 鳥見山中靈時	磯城郡城島村・桜井町	宇陀郡榛原町萩原・南生駒村小平尾など 9 ヶ所
6 菟田穿邑	宇陀郡宇賀志村宇賀志	なし
7 祭余邑	磯城郡桜井町・安倍村・香久山村	宇陀郡神戸村
8 笠井河之上	磯城郡三輪町・磯田村	なし
9 国見丘	決定なしがたきものとされる	宇陀郡神戸村本郷など 5 ヶ所
10 殿上 堀岡丘	〃	南葛城郡波上村本馬山など 2 ヶ所
11 忍阪 大室	〃	
12 吉野	〃	

『紀元二千六百年祝典記録』第 8 冊による。県内の分のみ、神武天皇聖蹟調査委員会による決定。

※赤線から下は決定されなかった地域

万葉集は、奈良時代末期に成立したとみられる日本に現存する中では最古の和歌集である。全 20 巻 4,500 首以上の和歌が収められており、天皇・貴族から下級官人・防人・大道芸人・農民など様々な身分の人々が詠んだ歌が選ばれている。7 世紀前半から 759 年までの約 130 年間の歌が収録されており、和歌の原点ともいわれている。日本の元号「令和」は、この万葉集の「巻五梅花の歌三十二首并せて序」の一節を典拠としている。

近世に入り、学芸文化の興隆から万葉研究を行う国学者が現れる。万葉集研究者として名を馳せた^{しもこう べ ちやうりゅう}下河辺 長 流^{けい ちゅう}と^{しやう けい}契 沖^{しやう けい}により著された『万葉集』の注釈・研究書『万葉代匠^{まんようだいしょう}記』（貞享 4 年（1687）初稿本）以降、田安宗武、本居宣長などにより万葉研究が進められ、近代には国語や国文学の観点から^{さいとう も きち おりぐち}齋藤茂吉、折口^{のぶ お}信夫、^{さ さ き のぶ}佐佐木信綱らにより万葉研究が続けられた。

そして昭和 15 年（1940）に照準をあわせた皇紀二千六百年祭の開催に伴い、

1940 年に選定された「神武天皇聖蹟」一覧

番号	聖蹟（文部省『神武天皇聖蹟調査報告書』1942 年 より）	現 地 点
1	菟狭（うさ） 推考地	大分県宇佐市南宇佐
2	岡水門（おかのみなと）	福岡県遠賀郡芦屋町正門町
3	埃宮・多都理宮（えのみや・たけりのみや） 伝説地	広島県安芸郡中町宮の町
4	高嶋宮（たかしまのみや） 伝説地	岡山県岡山市高島
5	難波之崎（なにわのみさき）	大阪府大阪市北区天満橋 2 丁目
6	唐津（たづ） 推考地	大阪府東大阪市日下町 6 丁目
7	孔舎衛坂（くさのえさか） 伝説地	大阪府東大阪市善根寺町 1 丁目
8	1. 雄水門（おのみなと） 伝説地 2. 男水門（おのみなと） 伝説地	1. 大阪府泉南市男里 2. 和歌山県和歌山市湊本町 2 丁目
9	名草邑（なぐさのみら） 推考地	和歌山県和歌山市広原
10	狭野（さの）	和歌山県新宮市佐野 3 丁目
11	熊野神邑（くまのかみのむら）	和歌山県新宮市阿須賀 2 丁目
12	菟田穿邑（うだのうちむら）	奈良県宇陀市菟田野宇賀志
13	菟田高倉山（うだのたからやま） 伝説地	奈良県宇陀市大宇陀大東
14	丹生川上（にうのかわかみ）	奈良県吉野郡東吉野村小
15	磐余邑（いわれのむら） 推考地	奈良県桜井市吉備
16	磯邑（いそのむら）	奈良県生駒市上町
17	狭井河之上（さいがわのほとり） 推考地	奈良県桜井市茅原
18	鳥見山靈時（とみのやまのなかのまつりのにわ） 伝説地	奈良県桜井市河西

17 元和 9 年（1623）宇陀松山生まれ、国学者。若くして京大阪に遊学し、漢学の傍ら国学を修めた。仕官の道を断念し、大阪で読書三昧のちに古学を研究、和歌をよくした。晩年、水戸藩の依頼で万葉集の注釈書の執筆を請けたが完成を見ないまま貞享 3 年（1686）病没。

18 寛永 17 年（1640）尼崎生まれ、真言宗の僧であり国学者。11 歳で出家し修行のため畿内を転々とする。病を得た下河辺長流のあとを引き継ぎ、『万葉代匠記』を完成させる。

「記紀」のみならず『万葉集』やこれらのゆかりの地も注目されることとなる。

「記紀」・『万葉集』は、文学、歴史学、考古学をはじめ学術分野の重要な研究対象となっており、その解釈をめぐる様々な議論が今もある。先述のように皇国史観¹⁹による国威発揚に用いられた経緯もあり、第二次大戦後は広く一般の人々に親しまれるものであったとは言えない時期もあった。

そんな中で平成23年度（2011）より、奈良県では「本物の古代と出会い、本物を楽しめる奈良」の確立を目的として「記紀・万葉プロジェクト」を立ち上げ、『古事記』完成から1300年を迎える平成24年（2012年）から、『日本書紀』完成から1300年を迎える令和2年（2020）にかけて、伝承関連地のデータベースづくりやイベントの開催等を展開してきた。

また、各市町村においても記紀・万葉プロジェクト会議を立ち上げ、記紀・万葉ウォーク等、現状から古代の面影を辿る取り組みを重ねている。これら一連の活動により、改めて「記紀」『万葉集』ゆかりの地に関心に向け、地域の誇り醸成へ寄与することを目指して取り組んでいる。

¹⁹ 日本の歴史が万世一系の天皇を中心として展開されてきたと考える歴史観。日中戦争から太平洋戦争期に、国民統合と戦争動員に大きな役割を果たしたが、敗戦により退潮した。

(2) 建造物

【神武天皇聖蹟顕彰碑】

石造。文部省の調査を経て選定された神武天皇聖蹟を顕彰するために建てられた記念碑。記念碑側面に「昭和十五年十一月 紀元二千六百年奉祝会」と刻まれており、昭和15年(1940)に建立された。宇陀市内にはこの記念碑が2箇所あり、菟田野宇賀志に「神武天皇菟田穿邑顕彰碑」、大宇陀守道に「神武天皇聖蹟菟田高倉山顕彰碑」が今も残る。

神武天皇聖蹟顕彰碑は、建築家大江宏^{おおえひろし}(1913～1989)が文部省技手時代に設計を担当した物件のひとつで²⁰、基壇の上に字を刻んだ切石を積んでいる。

いずれの顕彰碑も、掃除と手入れが行き届いており、地元の住民が大切に守っている。神武天皇の命日にあたる4月3日には祭典を行っている。



菟田穿邑顕彰碑



菟田高倉山顕彰碑
(国設置の石碑)

【神武聖跡関連の石造物】

石造。紀元二千六百年祭のために、国がゆかりの地を選定して石碑を建てたように、県や町村も同様に伝承地への道標や記念碑を建てた。

県の事業としては、男坂^{なんさか}伝承地(大宇陀半坂)^{はんさか}・女坂^{めさか}伝承地(大宇陀宮奥)^{みやのおく}・墨坂^{すみさか}伝承地(榛原萩原)^{はぎはら}・菟田川^{うだかわ}伝承地(榛原萩原)^{あめ}・菟田朝原^{あめ}伝承地(榛原雨師)の石碑を建立している。いずれの石碑にも、側面に「紀元二千六百年奈良縣奉祝會建立」「昭和十五年十一月」と刻まれている。

伝承地とされる場所の石碑は大きく、伝承地へ向かう途中の道に建てられた道標は分岐点の手前に置かれ、矢印ではなく指で進む方向を標記しており手間をかけて作ったものであることが推察できる。



菟田朝原伝承地石碑
(県設置の石碑)



男坂



女坂

(県設置の道標)

²⁰大江宏は日本万国博覧会日本館の設計などで知られる建築家である。「大江宏設計 神武天皇聖蹟顕彰碑の設計過程～文部省技手時代の大江宏の設計活動に関する研究その1」(『日本建築学会計画系論文集 第83巻 第747号』/石井翔大/2018年5月/日本建築学会)によると、大江建築アトリエ(旧大江宏建築事務所)には、大江が文部省技手時代に作成したスケッチや図面、書類などの一次資料が複数保存されており、現地踏査の復命や顕彰碑の設計プロセスがわかるスケッチが現存する。

つがなぎじんじや
【都賀那岐神社本殿】

伊那佐山の頂上に鎮座する神社。一間社神明造、銅板葺。『榛原町史』(榛原町史編集委員会/昭和34年(1959))の写真と現状を比較すると、茅葺から銅板葺に屋根の仕様が変ったが、躯体は現状の建物と同規模で材が相応に古いことから、昭和34年(1959)以前からこの場所にあったことがわかる。

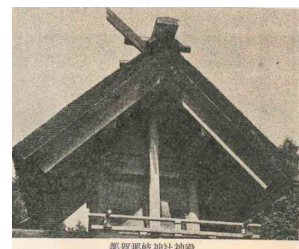
4月最終日曜日に、氏子が揃って本殿に参拝して、神社前の広場にて直会をする「ダケ登り」と言われる行事が続いている。かつては早魃時^{かんぼつ}に祈雨のため松明を持って「雨タンブリタモレ」と掛け声をかけながら参拝したと伝わる。祭神は高^{たか}竈^{おかみ}神、頬^{つら}那^な芸^ぎ神で、いずれも水を司る神である。



都賀那岐神社本殿



都賀那岐神社側面



『榛原町史』掲載写真

ちやういし
【都賀那岐神社 丁石】

伊那佐山の麓から頂上までの間、1丁ごとに丁石が設置されている。12 cm角、長さはまちまちだが、60 cm前後のことが多い。

麓の十八丁の丁石のみ大きく、昭和7年(1932)建造と側面に刻まれている。ダケ登りのときなど、伊那佐山へ登る際の目安として役立っている。

丁石にはそれぞれ、寄進者の名が刻まれており、三丁・九丁・十二丁・十三丁・十五丁・十六丁の寄進者の生没年を調べたところ、いずれも昭和7年(1932)当時は30代後半～60代後半と存命中で、丁石の質感がよく似ていることから、十八丁目の丁石と同時期に一丁間隔で建立したと推察する。丁石は現在、一丁、四丁、六丁、十一丁、十四丁が欠けている。



十八丁



十七丁



十六丁



十五丁



十三丁



十二丁



十丁



九丁



八丁



七丁



五丁



三丁



二丁

都賀那岐神社 丁石 昭和7年(1932)設置、石造

【^{ふみのね まろ ぼ}文 祢麻呂墓】（国の史跡）

文祢麻呂は、壬申の乱で武功を立てた武将である。天保2年（1831）八滝村の常七が畑の中から銅箱・金銅壺等を発見、奉行所へ届け出たあと、出土品は地元の^{りゅうせん じ}龍泉寺に保管されることになった。

出土品の中には墓誌があり、被葬者が慶雲4年（707）に亡くなった文祢麻呂であることが判明する。出土品は明治11年（1878）に帝室博物館（現在の東京国立博物館）に収蔵され、昭和27年（1952）に国宝に指定された。

銅箱等が出土した場所は、昭和57年（1982）に発掘調査が実施され、代表的な奈良時代の墳墓で、古代の上級役人の埋葬方法がわかった数少ない事例として重要な遺跡であることから昭和59年（1984）国の史跡に指定され、整備が行われた。

墳墓の中央に建てられた石柱には正面に「贈正四位上忌寸文祢麻呂將軍之墓地」、側面に「発掘天保二年九月二十二日」と刻まれている。この石柱は龍泉寺境内に残る石碑に刻まれた碑文によると、明治13年（1880）に最初に発掘された場所に建てたものであるという。

当時の堺県令（現在でいう県知事、このころ宇陀郡は堺県に属していた。）^{さいしよあつし}税所 篤 が内務省と直談判して資金百五十円を得て行った事業で、このほかに出土遺物の模造品を作り石碑の下に納めたこと、本物は帝室博物館に納めたことが記されている。

埋葬品を発見し代官所に届けた常七は、のちに名字帯刀を許され^{おおすみつね えもん}大隅常右衛門と名乗るようになる。埋葬品は代官所の命により八滝の龍泉寺境内に埋め、そこに塚を築いたという。以来、大隅氏と龍泉寺により、文祢麻呂將軍を弔う祭典が行われていたが、大隅氏が八滝を離れる際に1万円を龍泉寺に寄付し、このお金で毎年將軍祭を行うよう依頼した旨を石柱に刻んで龍泉寺墓地に設置した。

現在は、史跡整備を契機に地元住民を中心とした「文祢麻呂將軍顕彰会」が組織され、顕彰会の主催により秋のお彼岸に祭典を行うようになった。



文祢麻呂墓



明治期に建てた石柱



龍泉寺に残る碑文



大隅氏の石碑

さくら み じんじゃ

【桜実神社本殿】

佐倉の集落の天然記念物八ツ房杉を擁する神社。本殿は一間社春日造、銅板葺。建立年は不詳だが、境内の隅に建立された合祀記念碑によると、明治43年（1910）八坂神社、十二社神社と合祀して現在の姿となった。瑞垣を回し、本殿と合祀した神社が並んでいる。

歳旦祭、神武さん、秋祭りのほか、合祀した神社の祭典（金毘羅さん、お稲荷さん等）を執り行っている。



桜実神社本殿

う だ のたか ぎ

【菟田高城記念碑】

石造。菟田高城と彫られた碑。桜実神社の北東にある山の頂に建てられている。『菟田野町史』（菟田野町史編集委員会 編/昭和43年（1968））によると、「佐倉では、神武天皇関係の史跡になっている『菟田の高城』の碑の前でゴクマキを行う。」とあり、このころには現在の場所に建っていたと推察される。4月3日の神武天皇の命日に佐倉の人々がここへ集まり、「神武さん」の式典と御供まきを行っている。令和2年（2020）より、式典のみこの石碑の前で行い、一般参拝と御供まきは桜実神社境内で行うようになった。



桜実神社合祀記念碑



菟田高城記念碑

とり み しゃ てんじんじゃ

【鳥見社（天神社）】

木造三間社流造、銅板葺き。向拝や軒まわりに彫刻が施されている。

『大和國宇陀郡神社明細帳』（奈良県庁文書/明治12年（1879））の追記によると、墨坂神社の境内社と位置づけられている。

現在の社殿は、榛原地域のある場所から移築したと伝わっているが詳細は不詳。昭和初期に発行された絵葉書には、「マガタマ池と天神社」と記され、鳥居の奥に現在と同じ姿の社殿が写る。部材の風食等を観察すると、相応に古い。



鳥見社本殿



昭和初期の絵葉書

5月5日の鳥見山ツツジ祭の際に、墨坂神社から宮司が出向き、山開きと登山者の安全祈願の式典を行う。

すみさかじんじや
【墨坂神社本殿】

墨坂神社は、榛原萩原字天野に鎮座する。向井山を背後にし、宇陀川の南岸に境内地があり、本殿、拝殿、楼門や八幡神社、恵美寿神社、市岐嶋神社、菅原神社、龍穴神社、稲荷神社、天神神社が祀られている。

木造一間社春日造檜皮葺、当初は西峠の「天ノ森」^{てんのもり}にあったが文安6年（1449）に現在の場所に遷座した。本殿は文久造営期（1861～1864）の春日大社本殿を移築したもので、元治元年（1864）の墨書がある。

とんど、茅野輪くぐり、火祭りなど、年間を通じて様々な行事が行われるが、一年で最も重要視されている秋季大祭では『日本書紀』崇神天皇3月条になぞらえて赤盾8枚と赤矛8竿を境内に飾る。



墨坂神社本殿

【阿騎野の万葉歌碑】市の指定有形文化財（歴史資料）

石造、歌碑。大宇陀地域事務所の西になだらかな丘があり、南側を公園として整備した場所がある。その一角に、高さ2mほどの万葉歌碑がある。

柿本人麻呂の詠んだ「東の野にかぎろひの立つ見へて返り見すれば月傾きぬ」の歌が刻まれ、裏面に昭和15年11月に現在地に設置された経緯と、表面の歌は国学院大学名誉教授佐佐木信綱氏の揮毫であることが記されている。

石碑に刻まれたかぎろひの歌の追体験をする「かぎろひを観る会」は、この歌碑が設置されているかぎろひの丘公園で開催されている。



阿騎野の万葉歌碑



『名所旧跡古墳墓』所収の
伝山辺赤人墓

【伝山部赤人墓】

山辺三の山深くに、五輪塔が建っている。建立の時期など詳細は不明。『明治二十八年起 明治三十二年止 名所旧蹟古墳墓』（宇陀郡役所文書/明治32年（1899））に「山部赤人旧跡」と挿絵で紹介されているほか、『榛原町史』（昭和34年（1959）/榛原町）には「山辺（原文ママ）赤人の墓と伝承する石塔がある」と紹介され、現



伝山部赤人墓

在の状況と変わらず、石材も相応に古いことから、このころには既にあったことがわかる。春の彼岸に五輪塔の前で（雨天時は山辺三振興センター）地元自治会主催による赤人会式が行われている。

【山部赤人墓への道標】

石造物、伊勢街道とお越え道沿いに建つ道標。西面を平らにして、「山べの赤人古跡 これより八丁北／赤人のつかの玉浮圖千代ふりて／鳥のあとむすこけのいしふミ楳の家」と、右側に案内情報、左側には和歌が刻まれている。ほかの面には加工の跡がみられず、道標に建立の時期は刻まれていないが、『榛原町文化財図録』（榛原町文化財保存専門委員会 編/昭和 55 年（1991））によると、宝暦年間（1751～1764）とある。



昭和 34 年（1959）ごろの伝山部赤人墓（『榛原町史』より）



山部赤人墓への道標

（３）活動

【都賀那岐神社 ダケ登り】

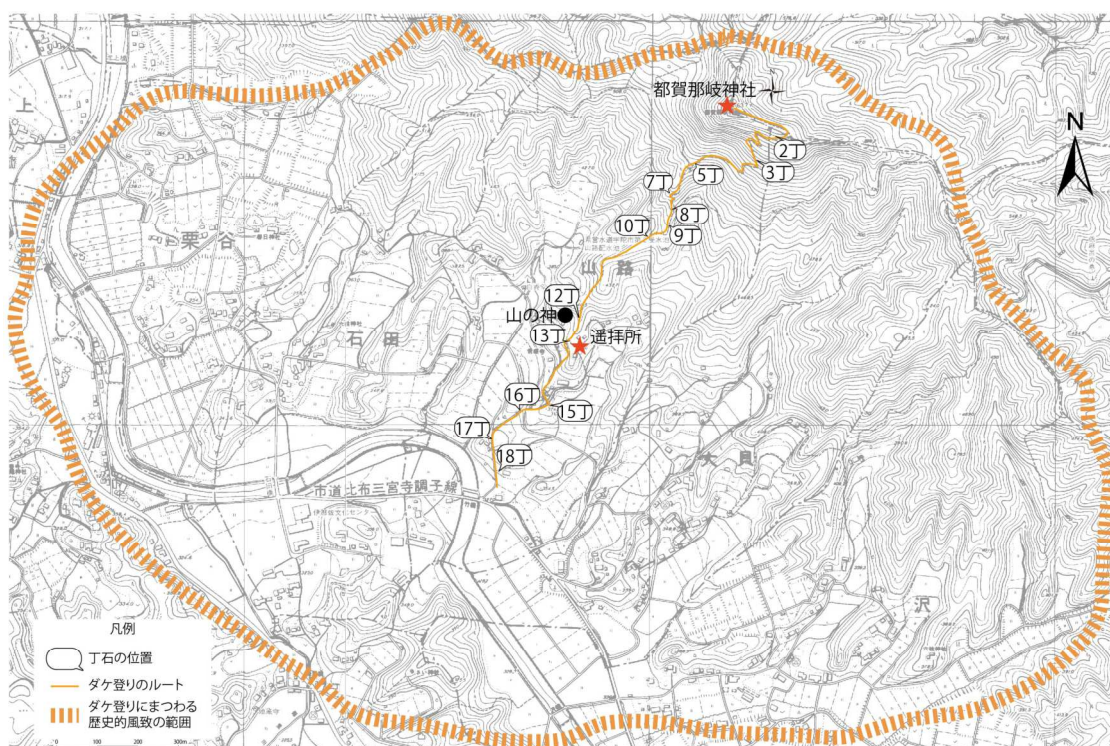
伊那佐山は、宇陀市のほぼ中心に位置する標高 680m ほどの山で、『日本書紀』第 3 卷 神武天皇即位前紀の中の、兄師木・弟師木^{えしき おとしき}を討伐し、疲れた兵たちをいやすため神武天皇が謡った謡²¹に登場する。

この、伊那佐山の頂上に鎮座する都賀那岐神社は、『文徳實録』（新訂増補 国史大系/平成 10 年）仁寿 2 年(852)7 月辛卯条に「辛卯、以大和國都賀那木神列於官社、」とあり古くからこの地に祀られていたようである。

ダケ登りは、毎年 4 月最終日曜日、氏子が遥拝所に集まり、伊那佐山山頂にある都賀那岐神社本殿に参拝し式典を行い、神社前の広場で直会をする行事である。かつては早魃時に祈雨のため参拝し、太鼓踊りを奉納したと神社縁起に記録が残る。

昭和 22 年（1947）4 月 18 日の大和タイムス（現在の奈良新聞）掲載の記事には、「伊那佐山の都賀那岐神社では十五日午後一時から恒例の嶽會式を盛大に行った。（原文ママ）」とあり、日程は動いているが長い伝統のある行事であることがわかる。

²¹「盾並めて 伊那佐の山の 木の間よも い行きまもらひ 戦へば 吾はや飢ぬ 島つ鳥 鶺鴒が伴 今助けに来ね」



ダケ登りにまつわる歴史的風致の範囲と、丁石の分布

【桜実神社 神武さん】

佐倉にある菟田高城で4月3日（神武天皇の命日）に行われるお祭り。古事記や日本書紀によると神武天皇がここで休息をとったと伝えられており、4月3日に近い日曜日に祭典と御供まきが行われる。

かつては桜実神社の北の山中に建立された菟田高城顕彰碑の場所で、右の昭和43年ごろ（1968）の写真のように祭典から御供まきまで全ての行事を実施していたが、平成31年（2019）より神職と代表者が顕彰碑の前で玉串奉納を行ったあと、桜実神社にて氏子一同で遥拝と祭典を行い、御供まきをするようになった。（平成31年（2019）開催時はコロナの影響で、御供まきではなく、餅の配布となった）

神武さんの行事は、大宇陀南部（下片岡・下垣内）や大宇陀守道にも残り、山頂の遥拝所や顕彰碑の前でお参りをしている。



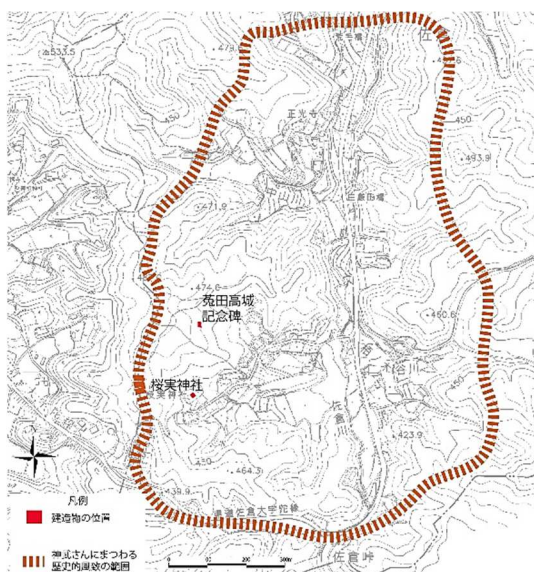
菟田高城顕彰碑



玉串奉納の様子



昭和43年（1968）ごろの御供まきの様子



神武さんにまつわる歴史的風致の図

とりみやま

【鳥見山ツツジ祭（花会式）】

宇陀市の西にそびえる鳥見山は、「記紀」に登場する鳥見山霊時ゆかりの地として近代に盛んに顕彰活動が行われた場所である。現在は、宇陀市榛原鳥見山公園の名称で宇陀市が管理しており、平成19年（2007）に「日本の歴史公園100選²²」に選定されている。宇陀郡一帯を見渡せる眺望と、ツツジや桜の名所として知られ、ハイキング客に人気がある。

この鳥見山公園を舞台に、毎年5月5日にツツジ祭が開催されている。本来は鳥見山の山開きの祭典で、墨坂神社の宮司が天神社に出向き、市および公園の関係者、登山客の立会のもと、献饌、修祓、玉串奉納などを行い、山の安全を祈願するほか、和太鼓の演奏があり、ツツジの植樹を行う。

『大和タイムス』昭和22年5月15日の記事に「榛原町長鳥見山の花会式は十三日行われたが満開のツツジに一日を楽しもうと各地から登山した人は正午までに五千人に及んだ（原文ママ）」とある。コロナ禍や天候不順の影響を受け、令和3年（2021）～令和5年（2023）は式典のみが執り行われた。



山開きの式典



太鼓の演奏



ツツジの植樹

²² 都市公園法施行50周年等記念事業実行委員会主催によるもので、優れた歴史的・文化的資源を有し、地域の活性化に貢献している歴史公園の中で自治体の推薦による応募の中から選ばれた。

【文祢麻呂將軍祭】

八滝西北、伊那佐山の山腹に八滝集落の墓地があり、そのすぐ側に文祢麻呂の墓がある。9月23日（祝）、朝から村の出会いで文祢麻呂墓周辺の草刈り清掃が行われ、同日10時から法要が始まる。

花とお供えで飾られている墓の前に八滝の人が集まり、龍泉寺のご住職による読経、焼香と続き、来賓・自治会長・顕彰会会長の挨拶で終わる。

天保2年（1831）に発見されて以来、墓を発見した大隅氏と龍泉寺にて毎年8月15日に文祢麻呂將軍の祭典を執り行ってきた。大隅氏が八滝を離れてからも前出（P70）の墓地の石碑に刻まれた文に従い、龍泉寺で有志による將軍祭が続けられてきたが、昭和57年

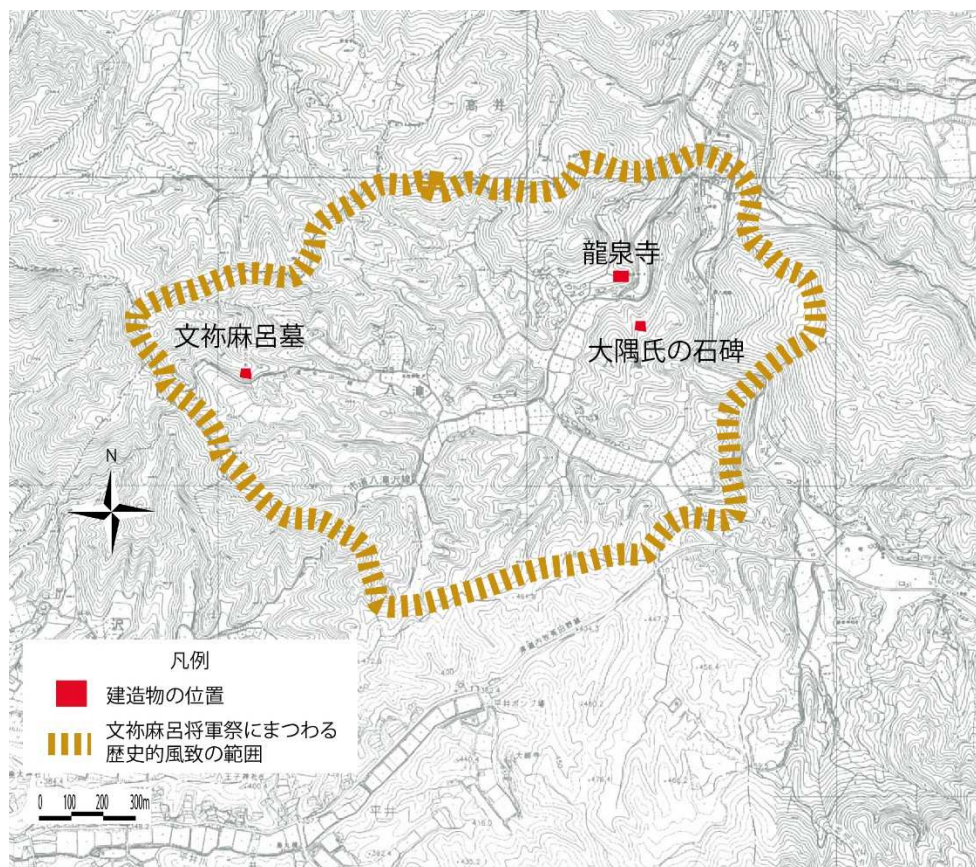
（1982）に文祢麻呂顕彰会が設立されたのを機に、9月23日（祝）に行うようになった。



文祢麻呂將軍祭の様子



参列者が順番に焼香する



文祢麻呂將軍祭にまつわる歴史的風致

【墨坂神社例大祭】

墨坂神社では、毎年11月1日から11月4日にかけて秋祭りが行われる。1日は「当屋祭」と呼ばれ、2日は宵宮で、神輿が「天の森」のお旅所に渡行する。そこで一晩過ごしたのち、3日の祭でお旅所から神社に向かって渡行する。神輿と太鼓台が墨坂神社に到着すると、楼門などから御供まきをする。昭和35年（1960）の御供まき風景の写真が残っている。4日は後片付けののち後宴祭が営まれる。また、夜には当屋の引継ぎである「お当屋渡し」が行われる。秋祭りの開催中、『古事記』崇神天皇の条になぞらえ、赤盾8枚と赤矛8本を楼門前に飾る。

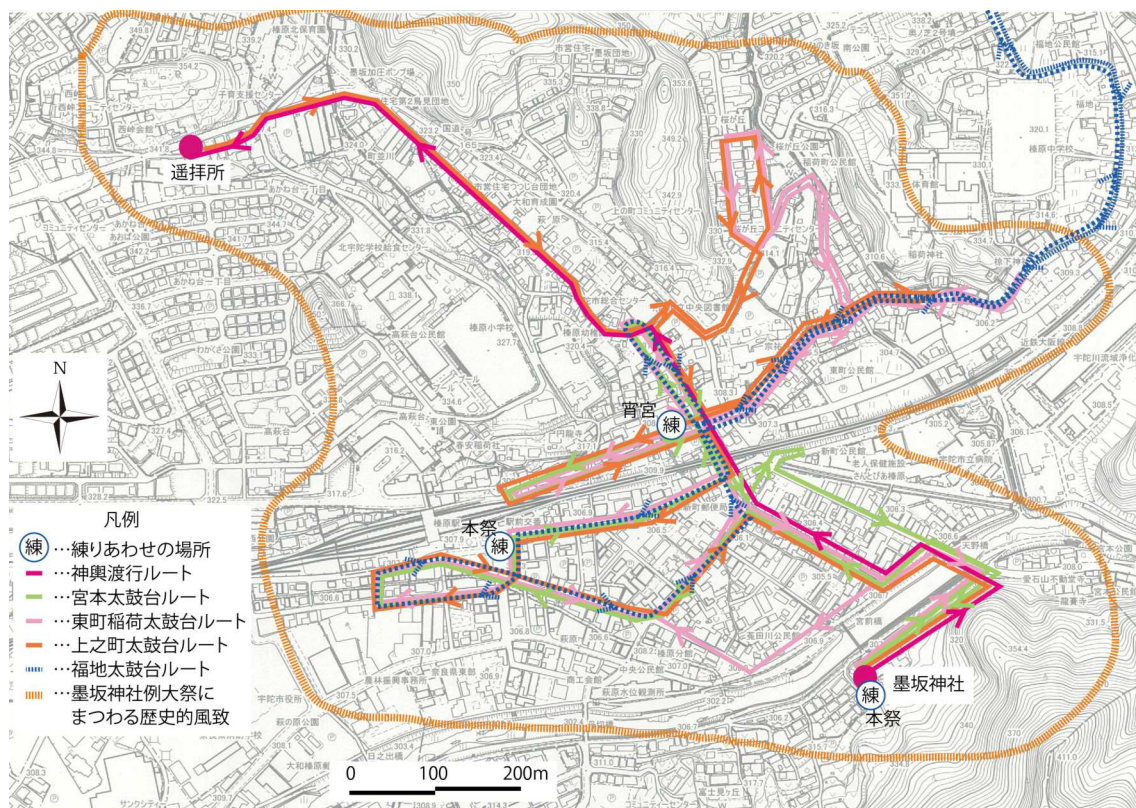


昭和35年 御供まきの様子
(吉田二郎氏撮影)



令和元年 境内前での練り合わせ

2日の宵宮と3日の祭では、神輿のほかに太鼓台が出る。宮本、福地、上ノ町、東町の4基である。それぞれ、伊勢街道の旧宿場町の面影を残す町の中を練り歩き、宵宮では常夜灯付近、祭では墨坂神社境内で練り合わせをする。



墨坂神社例大祭のお渡りルート（令和元年（2019））

【かぎろひを観る会】

「東の 野にかぎろひの立つ 見えて かへり見すれば 月傾きぬ」は万葉集の中でもよく知られた柿本人麻呂の詠んだ歌である。かぎろひを観る会は、柿本人麻呂の追体験をする行事で、令和3年（2021）に第50回目を迎えた。

開催日時は旧暦11月17日の未明で、かぎろひの丘万葉公園で焚火を起し、火に当たりながら夜明けに立つはずの、かぎろひを待つ。

寒空の下に集った来場者をもてなすため、地元産の葛湯等が振舞われる。満月が西に沈もうとするころ、その場にいる全員が東の稜線を見つめる。空が明るくなりかけたところに、柿本人麻呂が眺めた情景を思い描きながら、かぎろひの歌を詠唱して終わる。

この行事は、昭和15年（1940）に行われた万葉歌碑の除幕式に端を発している。旧暦11月17日としたのは、「阿騎野の朝」を描いた中山正實画伯が气象台とともに推測した日であることに由来する。

当時は焚火をして、小豆粥などを振舞った。以後、2年ほど町の行事として続いたが、それ以降は同好の士が集まり細々と開催していたと伝わる。

『広報おおうだ第58号』（大宇陀町/昭和53年（1978）12月）によると、大宇陀町観光協会²³の主催で第7回目となる「かぎろひを観る会」を開催している。

現在まで行事は連続開催されており、人麻呂の追体験を求めて全国から万葉集に関心を持つ人が万葉公園かぎろひの丘に集まる。



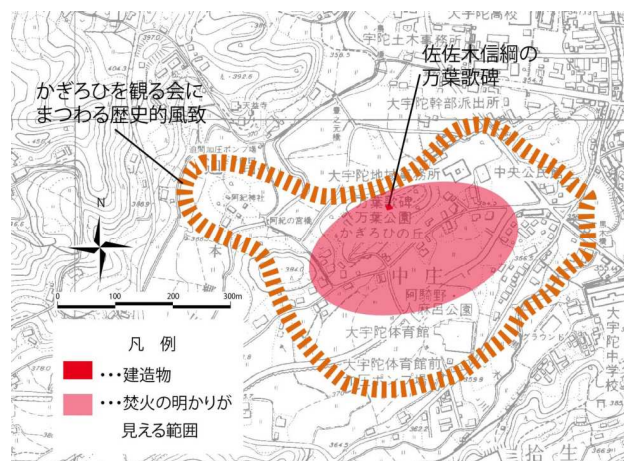
丘の上の焚火が遠くから見える



石碑をライトアップする



令和3年度のかぎろひを観る会



かぎろひを観る会にまつわる歴史的風致の図

²³ 大宇陀町観光協会は、『広報おおうだ16号』（大宇陀町/昭和46年9月）によると、観光客の誘致・受入態勢の強化により町の振興を図るため昭和46年6月に発足した。

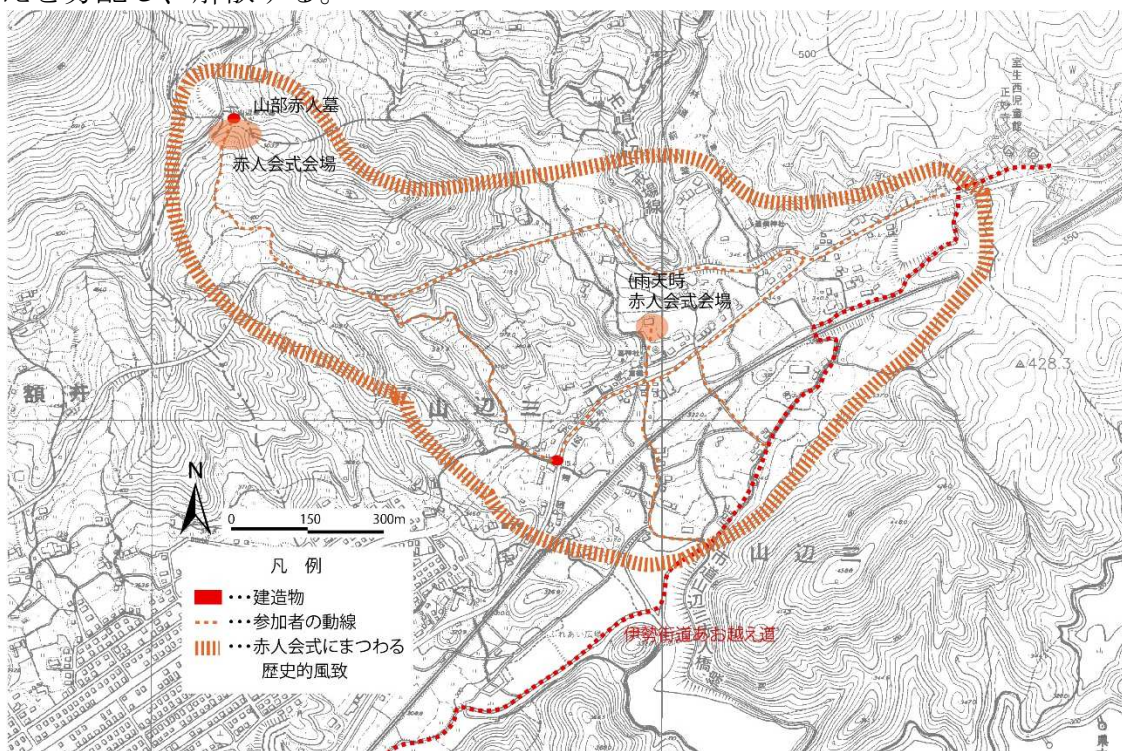
【赤人会式】

毎年3月21日13時～、地元山辺三自治会の主催により開催される会式。万葉の歌人、山部赤人墓と伝わる五輪塔があり、この場所で法要が行われる。『室生ダム水没関係地民俗資料緊急調査報告書』（昭和46年（1971）/奈良県教育委員会）に「この赤人の墓の前で四月下旬に村の祭として、お祭が営まれた。」とあり、現在と開催日程がひと月ずれているものの、そのころには既に営まれていた行事であることがわかる。



赤人会式の様子
(写真提供 山辺三自治会)

五輪塔前に祭壇を設け（雨天時は集会所に祭壇を設ける）、西方寺住職による読経、赤人をしのびながら参列者全員が焼香を行う。以上で法要は終わり、お供えを分配し、解散する。

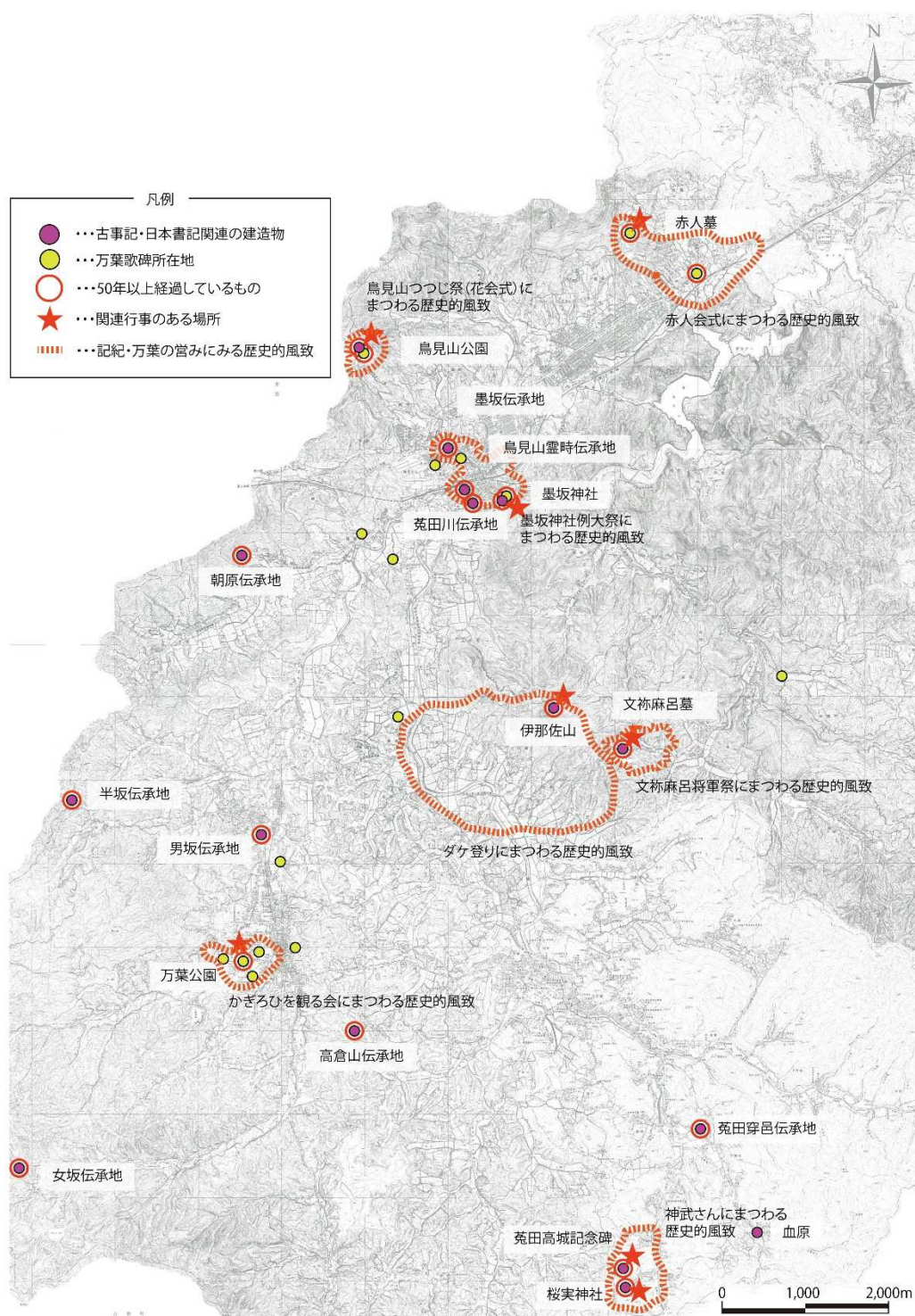


赤人会式にまつわる歴史的風致の図

（４）おわりに

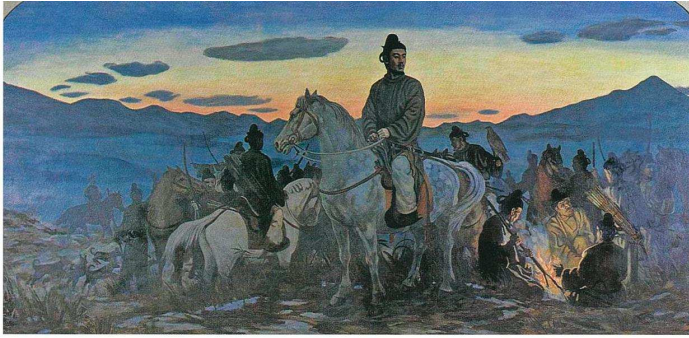
1300年前の時代に編纂された書物にゆかりの深い地名が多く残る宇陀。江戸時代には、旅の目的地のひとつとして、記紀・万葉ゆかりの地が紹介されたり、その場所へ向かうための道標や歌碑が建てられたりと、地元の人にとって

来訪者に誇れる大切なものであるとの認識が強かったことが伺える。また、万葉秀歌の追体験や神武天皇や万葉歌人の法要等、ゆかりの地と推定される場所においての活動が現在も見られ、山と緑が織りなす山村集落の景色と相まって、良好な歴史的風致を形成している。



記紀・万葉にまつわる歴史的風致

コラム1 壁画「阿騎野の朝」^{あきの}



壁画「阿騎野の朝」(宇陀市中央公民館 蔵)



移転決定時の新聞記事

宇陀市中央公民館の大ホールに飾られている壁画、「阿騎野の朝」(市の指定有形文化財)。「東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ」という柿本人麻呂の歌を題材に、持統天皇6年(692)に阿騎野^{あき}へ遊^{ゆうりよう}獵^{りよう}に来た^{かるのみこ}軽皇子(のちの文武天皇)とその一行が、夜明けを迎えている情景を描いたものである。

この壁画は、昭和15年(1940)の紀元二千六百年記念事業の一環で橿原市に建設された「大和国史館」の大展示室の壁画であった。制作を担当した中山正實画伯は、「かぎろひ」の歌が詠まれた場所や日時について、当時の気象台に問合せ、実際に大宇陀へ赴き考察を重ね、壁画の場所は阿紀神社前面の丘の上(現在の万葉の丘公園)、日時は持統天皇6年(692)11月17日午前6時前後であると導きだし、この壁画を完成させた。

壁画の転機が訪れたのは昭和55年(1980)秋。県立橿原考古学研究所付属博物館が新築され、大和国史館の展示物はすべて博物館へと移されたときである。役目を終えて閉鎖された大和国史館に置かれたままとなった壁画の状況を知った大宇陀町は、画題ゆかりの地であり、かねてよりこの壁画を迎え入れたいとの意向があったことから、所有者である奈良県に壁画の譲渡を申し出た。

奈良県から無償譲渡の回答を得て、今度は壁画の移転方法についての検討が進められた。幸いにも、壁に直接ではなく、キャンバスの上に描いて壁に取り付けた絵であったため、絵画修復家の手により壁画の移転が可能と判断された。

キャンバスに描かれた壁画とはいえ、予想以上に壁面に強固に取り付けられていたため、剥がす作業は難航した。昭和56年(1981)11月16日から作業に着手し、11月26日に剥がす作業は完了、破損箇所等は修復し、昭和57年(1982)2月27日に現在の場所(中央公民館大ホール)への移転作業が終わった。

これらの一連の工事は大宇陀町制40周年記念事業として位置づけ、除幕式等の記念行事が盛大に行われた。大和国史館と共に失われる運命にあった壁画は、紆余曲折を経て、画題のふるさと大宇陀に安住の地を得たのである。

2 伊勢街道の旧宿場町の営みに みる歴史的風致

はじめに

奈良盆地の中央部を横断する横大路は、西の河内・摂津から伊勢へ通じる重要な街道である。この横大路を慈恩寺から長谷寺（いずれも現在の桜井市）を通して東に進むと、西峠を越えて萩原^{はぎはら}に至る。萩原は、御杖に向かう伊勢本街道と名張へ向かう伊勢北街道（表街道とも呼ばれる。以下より「あお越え道」という。）の分岐点がある交通の要衝地である。萩原から香醉峠^{こうずいとうげ}を越えて北へ向かえば東山中^{ひがしさんちゅう}に至り、伊賀・山城へと通じ、萩原から南へ行けば、多武峰^{たうのみね}・吉野に至り、あらゆる方面からの人が行き交う場所であった。

中でも、交通の要衝地として萩原の発達が目覚ましく、これには長谷詣と伊勢詣の影響が大きかった。京都より伊勢神宮へ詣でるなら、近江路を経由するのが本来だが、南都巡礼・長谷詣をするため大和路を利用する者が増え、こちらが主流となる。

当時、伊勢街道には通行税を徴収するための関所が何箇所か設けられており、長谷関に続いて萩原関^{いだに}（井足関）が置かれたが、これは皇室御領の関であった。次の関は赤埴^{あかばね}（赤埴）、諸木野、黒岩と、短い区間に多くの関所が固まっているのは、それぞれの荘園領主が、経済政策のひとつとして関所を設けたのである。それだけ交通量が多かったことがうかがえる。



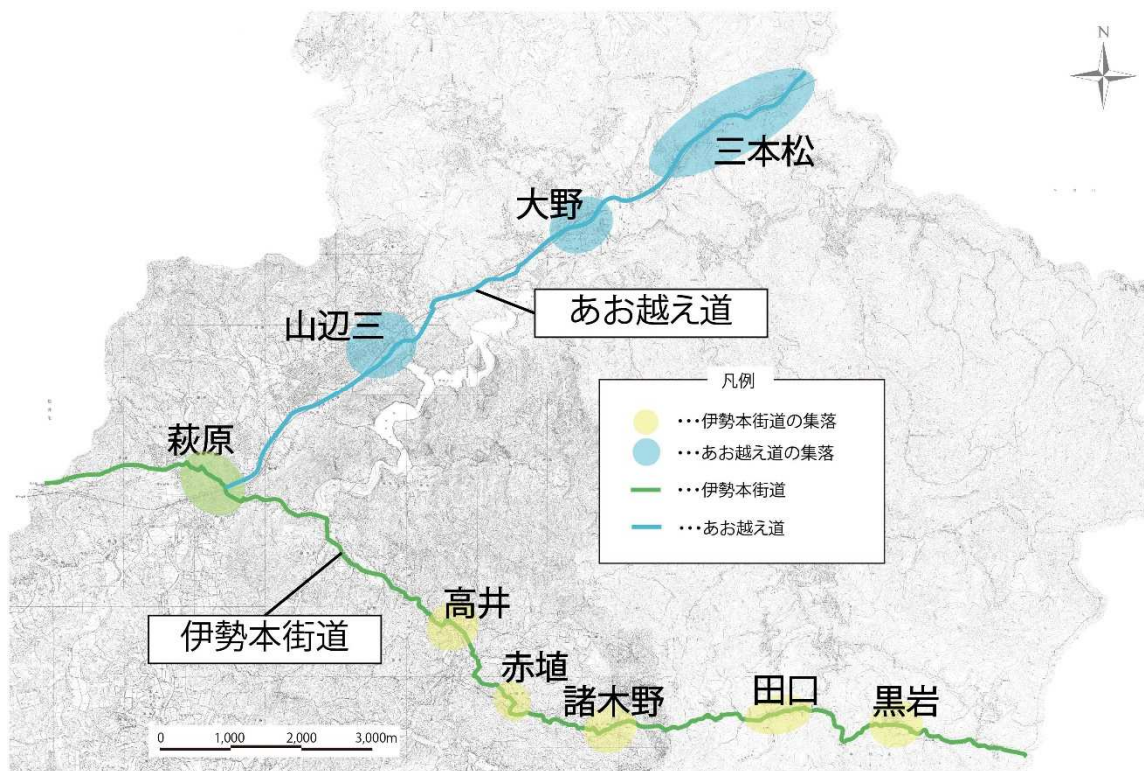
戦国時代に入って関所が廃止され、江戸時代以降は街道筋に旅籠や商家が立ち並ぶようになり、萩原、高井、赤埴、諸木野、田口など宿場町が形成された。近代に入って鉄道や自動車の普及に伴い、歩いて伊勢参詣をする人の数は大幅に減ったものの、現在でも宇陀市内には、常夜灯や道標など、伊勢街道の面影を残す道や旧宿場町が何箇所もあり、観光名所やハイキングコースとして訪れる人を迎え入れている。また、こうして訪れる人のために行う道づくりやおもてなしなど、集落で古くから続いている行事がいくつか残っている。

ここでは、伊勢街道により発展した町場や集落の面影を色濃く残す地域を舞台に繰り広げられる、地域に根差した活動について紹介する。

2-1 伊勢街道の分岐点、萩原の年中行事にまつわる歴史的風致

2-2 本街道沿いの集落の営みにみる歴史的風致

2-3 あお越え道沿いの集落の営みにみる歴史的風致



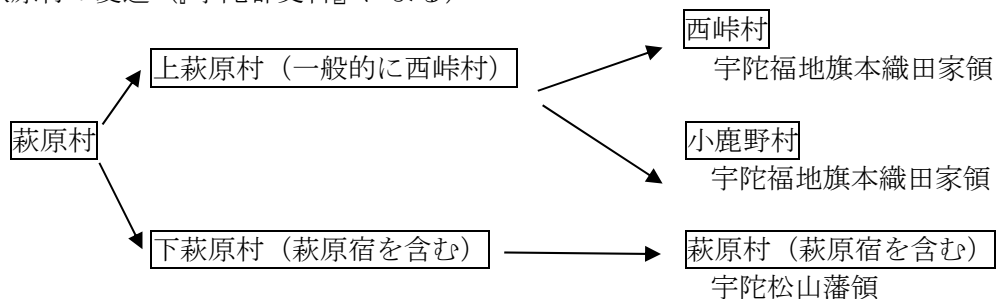
宇陀市内の伊勢街道と旧宿場町の図

2-1 伊勢街道の分岐点、萩原の 年中行事にまつわる歴史的風致 (1) はじめに

萩原^{はぎはら}は、古くはハイバラと読まれ、古地図に灰原^{はいはら}と書かれているものもある。中世の萩原庄の一部が近世のはじめに「萩原村^{はいばら}」と呼ばれたが、『宇陀郡史料』(大正6年(1917))によると寛永7年(1630)に萩原上村、萩原下村に分離したとある。明治22年(1889)に合併して榛原村、明治26年(1893)に榛原町となる。陸上交通の中心地で、伊勢本街道、あお越え道、松山往還、古市場往還の要に位置する。墨坂神社や宗祐寺、名所に鳥見山があった。

かつての様子を伝える絵図等の史料が乏しく、まちの成り立ちは不明だが、『宇陀郡史料』(大正6年(1917)/宇陀郡役所 著)によると「本村元榛原の字を用い、中古這原或は灰原、後ち(年月不詳)今の字に改む、昔時本郡玉小西村と一村たり、寛永の頃分て二村となり上榛原下萩原と云ひ(年紀不詳)改めて今の称を用ゆ。」とある。

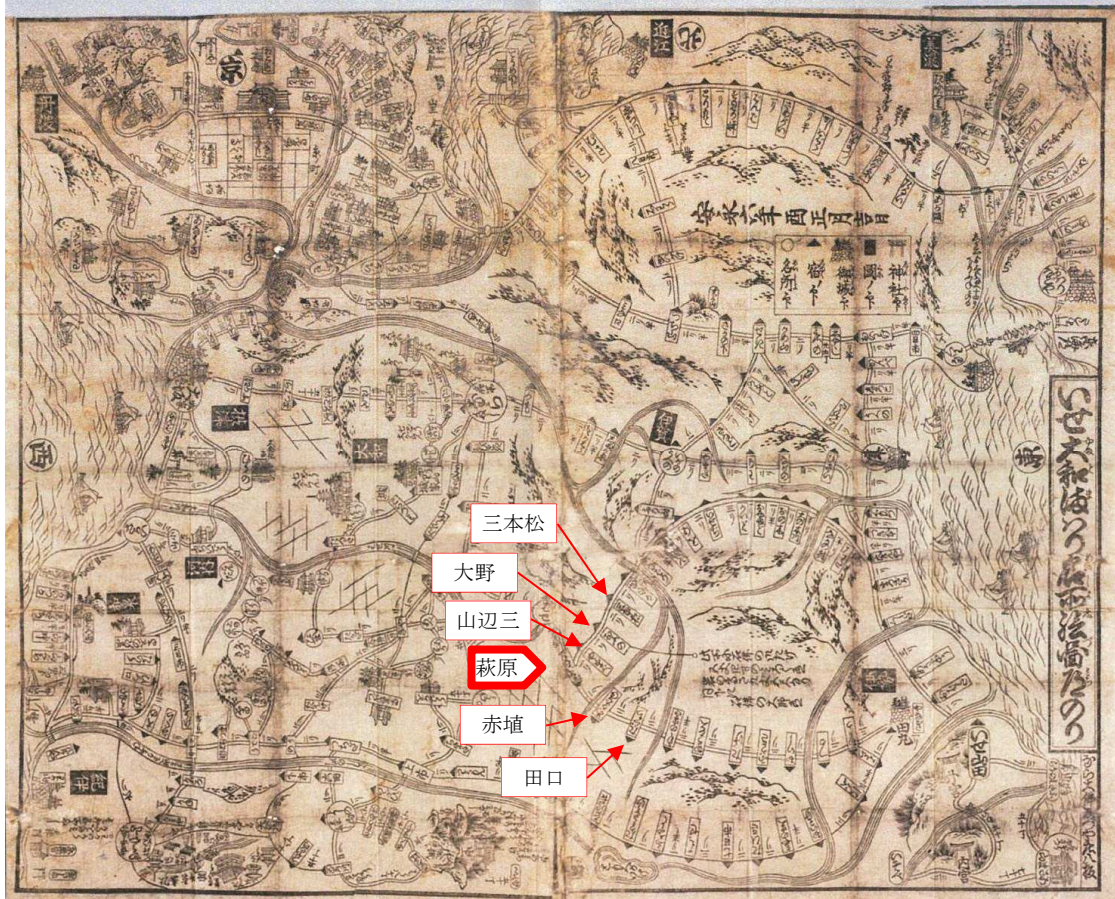
萩原村の変遷(『宇陀郡史料』による)



萩原は近世を通じて伊勢、長谷参詣者などで賑わった村方であり、特に中期以降は本街道とあお越え道との分岐点があるため、寺社詣客などで賑わった。『新撰伊勢道中細見記』(宝暦13年(1763)刊)によると、萩原については「茶や宿や多し、札の辻を左へ行バ阿保^{あお}ごへ道、すぐに行バ赤^(ね)ばにかい^{より}どう也、是方田口^{ばしゃくといや}までハ馬借問屋なし」とある。萩原には、休息をとるための茶屋や宿屋が多く、馬を利用した荷物の輸送業者もあったようだ。

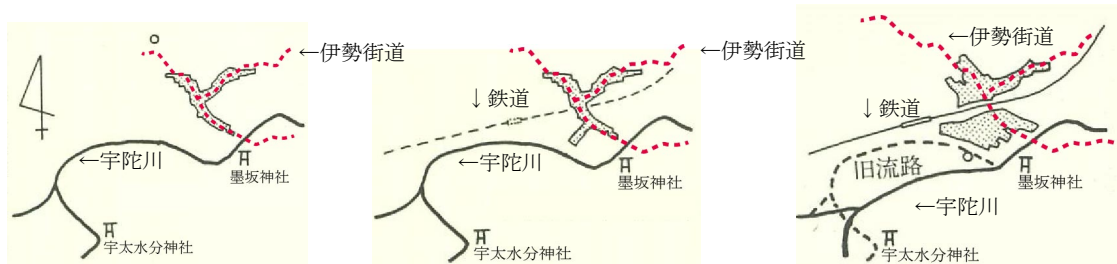
また、往来する人の利便を図るため、江戸時代中期以降、伊勢街道あるいは伊勢街道周辺の道に道標や常夜灯が建立された。萩原周辺でも、追分には「右 いせ本かい道 左 あをこ江みち」と刻まれた石の道標^{おいわけ}が、分岐点から10mほど南に、文政11年(1828)の銘がある常夜灯が残っている。

さらに、この分岐点には高札場があったことから、「札の辻」と呼ばれ、札の辻周辺には、「あぶらや」「あわや」「江戸屋」「河内屋」「いたこや」「井谷屋」「浦屋」などの旅籠が並び、萩原は宿場町として賑わっていた。



いせ大和まはり名所絵図道のり（安政6年（1777）（奈良県図書情報館蔵）

昭和5年（1930）の参宮急行電鉄の開通や自動車の普及に伴う道路網の発達により、徒歩で伊勢詣をする人は減ったものの、年末に徒歩での初詣が続いているほか、現在では健康志向の高揚に伴い、ウォーキングや観光目的で歩く人の姿をよく見かける。萩原は、古い町家が混在する旧市街地で、伊勢街道の宿場町の雰囲気をとどめた良好な歴史的環境を持った地域である。



明治41年（1908）

大正11年（1922）

昭和42年（1967）

萩原の町の変遷図（榛原町史より）

(2) 建造物

【旧旅籠 あぶらや】市の指定有形文化財（建造物）

伊勢本街道とあお越え道の分岐点にある旧旅籠。木造二階建、切妻造、棧瓦葺。煙出しがある。江戸時代末期頃の建物と推定され、戸袋には龍田村の道参講一行が弘化4年（1847）に書き残した墨書が残っている。旅籠を廃業したあとも、宿場町萩原を象徴する存在の建物である。

『宿料帳』（明治40年（1907）/油屋 宇陀市教育委員会所蔵）が残っており、このころまで宿をしていたことがわかる。現在は旅籠の部分は市の歴史文化館として一般公開されている。

また、10月には融通念仏宗の総本山大念仏寺の大和御回在の休憩場所に利用されるほか、伊勢まで歩講等、参宮のために立ち寄る人々のおもてなしの場となる。

【札の辻の道標】

伊勢本街道とあお越え道との分岐点に設けた、萩原札の辻にある角柱型の道標。東面に「文政十一戊子年（1828）三月吉日」、南面に「御室御所御寄附灯籠并道教守護人初生寺」と刻まれ、仁和寺の寄進であることがわかる。

度重なる道路工事の結果、現在は安全のため道の隅に移設されたものの、道案内の役割は当時と変わらず果たしている。

【太神宮灯籠】

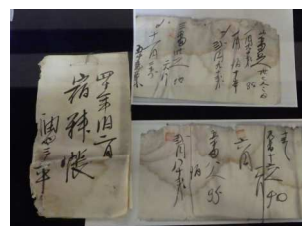
本体南面に「文政十一年（1828）」、西面に「御室御所御寄付」と刻まれていることから、分岐点の道標と共に寄進された太神宮灯籠であることがわかる。札の辻から25m南の位置に据えられている。当初は常夜灯として設置され、灯明の油代は本街道沿いの旅籠等が拠出したと見られている。現在では、灯明は電球に変わり、おかげ祭や例大祭の宵宮のときに点灯している。



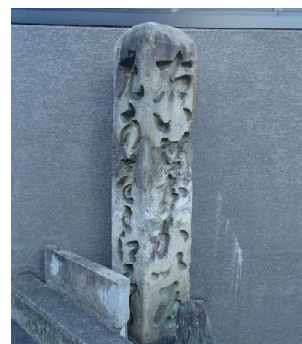
あぶらや外観



二階戸袋墨書



宿料帳



札の辻の道標



太神宮灯籠

(3) 活動

【宗祐寺の御回在】

札の辻から 100m 東、あお越え道に沿う高台に、融通念仏宗の寺院、宗祐寺がある。境内に文化 13 年（1816）に萩原社中の人々の手により建立された芭蕉句碑や庚申像が残る。融通念仏宗は、17 世紀以降、大念仏寺（大阪市平野区平野）を中心として、摂津・河内・大和で形成された宗派で、萩原町の住民の多くは宗祐寺の檀家である。

融通念仏宗の総本山である大念仏寺の本尊は、5 幅の『天得阿弥陀如来』の掛け軸で、これを護持して鉦^{かね}を打ち鳴らしながら檀信徒宅を回る行事を「御回在」と呼ぶ。如来さん、天得さん、ほとけさん、お上人さんなど、様々な呼称で親しまれている。

寺伝によると、「御回在」は元和 4 年（1618）第三十六世法主道^{ほっしゅどう}和^わ上人^{しょうにん}が徳川家康の寄進を辞退するかわりに念仏勧進・弘通（広範囲にわたる布教や寄附を集めて回ること）の許可を得たことが始まりとされている。現在では河内（東大阪市、八尾市、羽曳野市、富田林市、河内長野市、千早赤阪村、寝屋川市、枚方市、交野市、堺市、松原市）、大和（奈良市・大和郡山市・生駒市・桜井市・橿原市・天理市・香芝市・宇陀市・王寺町・斑鳩町・平群町・三郷町・三宅町・上牧町・河合町・広陵町・川西町・田原本町・安堵町・名張市）と近郷（大阪市内）の御回在が行われている。

大和御回在は 92 日間（3 年に 1 度の山中回りの年は 100 日間）の日程で、萩原には 10 月 15 日にまわってくる。15 軒ほどある檀家の家を順番に回り、本尊を黒塗りの桐箱から出して広げる「お掛^{たて}かり」或いはお掛^{たて}かりをしない勤行^{たてえこう}「立回向」を行う。

また、宗祐寺でも総本山とは別に「御回在」を行う。宗祐寺に伝わる「年中行事」（明治 42 年（1909）頃に成書されたと推定）に「近檀回在是ハ（略）」とあり、長く続けられている行事であることがわかる。現在は 6 月と 11 月に行われ、6 月は 1 日から 22 日にかけて、宇陀一円を回る。基本的に移動では車を利用するが、萩原のように檀家が近隣に分布しているところは徒歩により回っている。

朝 8 時に宗祐寺を出発し、先頭の僧が鉦を鳴ら



総本山による大和御回在の様子



本尊の到着を待つあぶらやの仏間
（写真提供：中川 眞佐子氏）

し、本尊を納めた桐箱を抱えた僧のあとにもう一人の僧が続く。

御回在を迎え入れる家では、到着予定時刻が近づくと玄関先に出て本尊と僧たちを迎え入れる。そのまま仏壇前へと案内し、「お掛かり」または「立回向」に臨む。

まちのひとが路上で僧の一行とすれ違うときは立ち止まって道をあげ合掌する様子が見られる。

次頁の図の通り、東町方面から周り、途中休憩等を入れながら、萩原一円の檀家宅を巡回する。雨天の場合は、傘をさして町の中を歩く。

伊勢街道沿いの風情がある町並みに響く鉦の音、読経の声は、萩原においては夏や冬の訪れを知らせる風物詩である。



御回在の様子

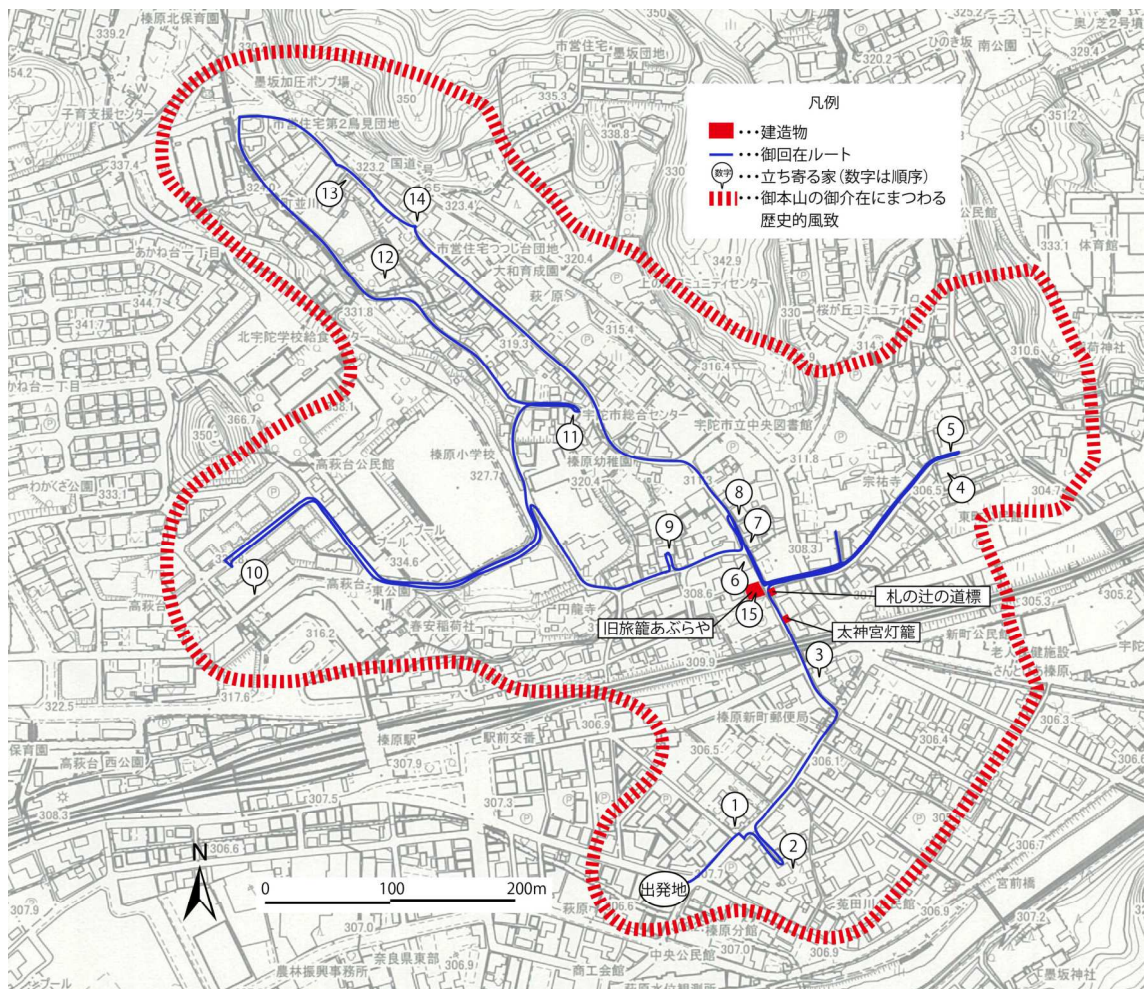


1 軒ずつ檀家宅へ上がる

(4) まとめ

古来より奈良盆地から東へ通じる交通の要衝地として栄えた萩原は、伊勢本街道とあお越え道の分岐点として、宿場町に発展した。この中心部に位置する宗祐寺は、旧市街地に檀信徒を多く抱えている。

宿場町の雰囲気を残す歴史的な町並みを舞台に、鉦の音に続いて本尊を抱えた僧の一行が行脚する光景は良好な歴史的風致を形成している。



御回在にまつわる歴史的風致

番号	名称	構造形式/年代等	番号	名称	構造形式/年代等
①	N 家住宅	木造二階建、切妻造、棧瓦葺/建築年代不詳	⑨	K 家住宅	木造二階建、陸屋根/昭和 40 年 (1965)
②	T 家住宅	木造二階建、入母屋造、棧瓦葺/建築年代不詳	⑩	K 家住宅	木造二階建、切妻造、S 形瓦葺/建築年代不詳
③	I 家住宅	木造つし二階建、切妻造、棧瓦葺/建築年代不詳	⑪	Y 家住宅	木造つし二階建、切妻造、棧瓦葺/建築年代不詳
④	O 家住宅	木造二階建、切妻造、棧瓦葺/建築年代不詳	⑫	M 家住宅	木造平屋建、入母屋造、棧瓦葺/建築年代不詳
⑤	Y 家住宅	木造二階建、切妻造、棧瓦葺/建築年代不詳	⑬	W 家住宅	木造つし二階建、切妻造、棧瓦葺/建築年代不詳
⑥	I 家住宅	木造つし二階建、切妻造、棧瓦葺/建築年代不詳	⑭	K 家住宅	RC 造、二階建、陸屋根/建築年代不詳
⑦	I 家住宅	木造二階建、切妻造、棧瓦葺/昭和 47 年 (1972)	⑮	あぶらや	木造つし二階建、切妻造、棧瓦葺/江戸時代末期 (推定)
⑧	O 家住宅	木造二階建、切妻造、棧瓦葺/建築年代不詳			

2-2 本街道沿いの集落の営みに みる歴史的風致

(1) はじめに

伊勢本街道は、大和国と伊勢参宮を結ぶ主街道として利用されており、飼坂峠を越え田丸を経て伊勢に入る道をいう。大和から伊勢への最短コースにあたるが、険しい山道が多く、旅人におそれられた。その反面、記紀などにあるように倭姫命が天照大神鎮座の地を求めての旅に関わる伝承も多いことから、『幸講定宿帖伊勢道中案内図』明和5年(1768)幸講)によると「俗説に曰く、始めて参宮する人かい坂をこゆる事、神の御心に叶ふと云う故、はせ田丸越を参り道とす」とあり、信仰の道として優先的に参宮の旅人に利用されたとみられる。

宇陀市内に残る伊勢本街道沿いの集落は、萩原^{はぎはら}を起点として西から順に、檜牧^{ひのまき}、高井^{たかい}、赤埴^{あかぼね}、諸木野^{もろきの}、田口^{たぐち}、黒岩^{くろいわ}と続き、曾爾村^{そにむら}の山粕^{やまかす}へつながる。諸木野から石割峠を越えて田口へ続く道が、高低差があり難所とされている。

萩原から黒岩にかけて、旧旅籠や道標が点在しており、現在でも地道のままの場所や田畑が広がり森に囲まれた道が続き、集落に残る歴史的な建物と相まって旧街道の雰囲気をよく伝えている。

また、旧街道は定期的に地元の人たちにより手入れされているため、道が荒れて通行できない、という事態には殆どならない。高井から黒岩にかけては道づくり等の習慣も継続されており、活動の背景に伊勢本街道沿線に暮らす人々の、道行く人への思いやりが感じられる。



宇陀市内における伊勢本街道の旧宿場町および道標等の分布図



萩原



高井



諸木野



石割峠への道



田口



黒岩

(2) 建造物

【船尾垣内の道標】

石造、板碑型の道標。文字が風化して読み取りにくい
いが、拓本により「右いせみち 寛文四年（1664）
梵字（阿弥陀三尊）奉供養回国 同行十二人 左やまみち
十月十五日」と刻銘されていることがわかる。いつも
花が供えられ、地元で大切にされている。現在も伊勢本
街道の名残を伝え、伊勢への道を示している。伊勢本街
道沿いには、年代不詳のものも含めてこうした道標がい
くつも残っている。



船尾垣内の道標

【松本家住宅】

木造つし二階建、切妻造庇付。伊勢本街道に面して
建つ家で、『伊勢本街道 - 奈良県「歴史の道」調査報告書
- 』（昭和 60 年（1985）3 月/奈良県教育委員会）によ
ると、18 世紀後半頃と推定され、幕末頃まで旅籠を営ん
でいた。道づくりの際には、作業にあたる人たちの休憩場
所を提供している。杉林の間からは、高井の集落を見下
ろすことができ、道路向かいの小さなスペースに椅子を置
き道行く人が腰を下ろしてひと息つけるようにしている。



松本家住宅

【飯岡家住宅主屋】国の登録有形文化財

木造平屋建、茅葺一部瓦葺、片側入母屋造。田口の集
落の東側にある民家で、旅籠もしていた。建築年代は不
明だが、江戸時代後期のものと推測されている。

主屋は敷地中央に建つ、桁行 19m 梁間 11m の大型民家。
屋根は南北棟の茅葺で、南面は高塀造、北面は入母屋造。南側に土間を設ける二
列三室をとる六間取りで、座敷や仏間、納戸などからなり、カミザシキは上質な
つくりになる。高塀造りの面影を伝える農家。このほか敷地内の内蔵及び米蔵も
登録文化財。



飯岡家住宅

(3) 活動

【旧伊勢本街道の道づくり】

内牧地域まちづくり協議会では、防犯・防災部会の活動の一環で、10月と12月の年2回、毎回場所を変えながら伊勢本街道の道づくりを実施している。12月末に「おかげ参り」の御一行がこの道を通るため、それに間に合うように主に草刈りや倒木・支障木の撤去作業を行い、通行者の安全・安心の確保に取り組んでいる。

道づくりそのものの歴史は古く、『内牧村風俗誌資料』（大正4年（1915）/内牧村）によると青年会の活動として「現時行ヒツツアル事業ノ主ナルモノヲ擧ゲレバ 植林 道路修繕 講演會開催（中略）」とあり、内牧村に所属する17歳～30歳までの青年が担っていた作業を、内牧地域まちづくり協議会が継承している。



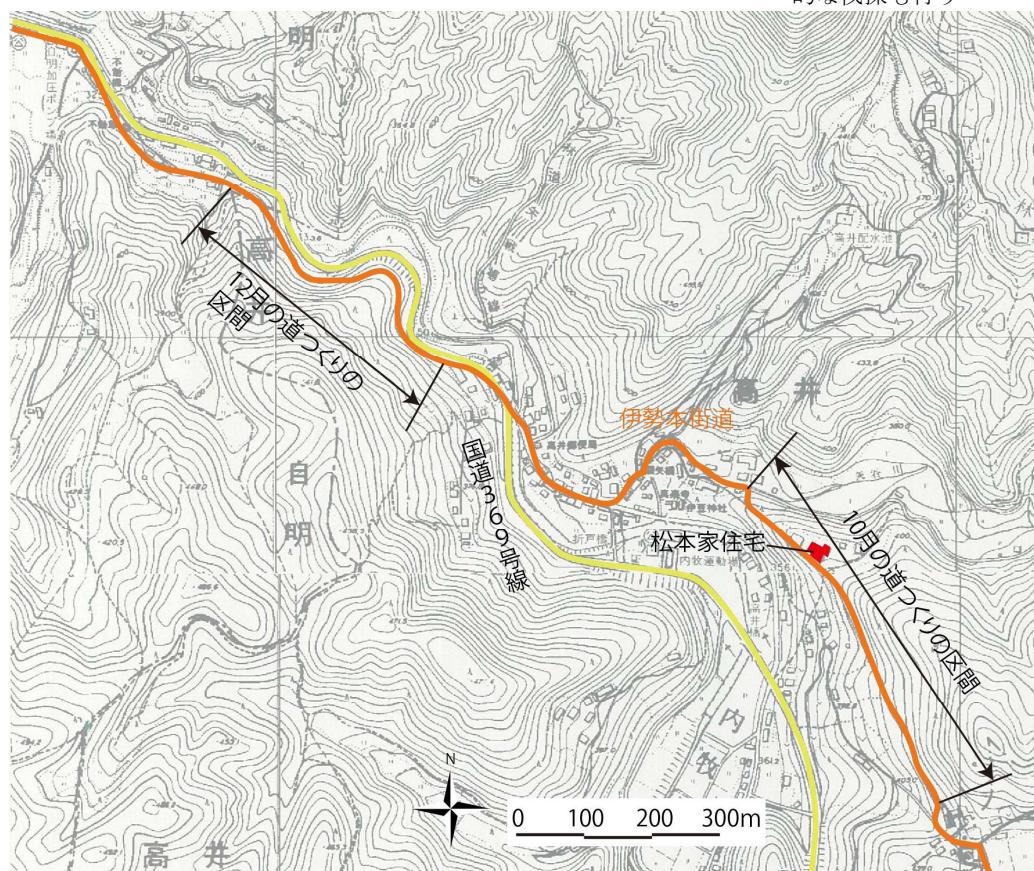
松本家前を東へ



支障木の撤去や草刈りをする



12月の道づくりでは本格的な伐採も行う



伊勢本街道の道づくり区間（令和3年度（2021）実施分）

【伊勢迄歩講^{いせ まであるこう}】

昭和 38 年（1963）、ユースホステル運動²⁴の一環として大阪ユースホステル協会が『みんな歩こう』運動」を提唱し、歩くことを通しての「学び」や「体験」「健康づくり」を大切にした活動を展開していた。こうした背景の中、昭和 46 年（1971）に昔の旅人が辿った旧伊勢本街道を可能な限り忠実に辿り、自然・歴史・文化に触れながらみんなで協力しながら歩く楽しさを体感することを目的として「伊勢迄歩講」が始まった（平成 2 年（1990）12 月 18 日付け読売新聞によると「大阪ユースホステル協会主催の年末恒例行事で、今年で 18 回目」とある。）

主催は大阪ユースホステル協会、参加を希望するユースホステル会員で講を組織し、事務局と学生ボランティアが参加者の完歩を支援する。11 月頃から募集が始まり、12 月上旬に参加者説明会を開催、その際に結団式を行う。

講の一行は 12 月 28 日に大阪の玉造神社を徒歩で出発し、元旦午前 0 時に伊勢神宮の内宮到達を目指す。伊勢本街道をひたすら進む行程で、宇陀市に至るのは 12 月 30 日、あぶらやで休憩を取り、そこで地元の方のお接待を受ける。

翌日は、墨坂神社への参拝から始まり、高井（ここでも松本家でお接待を受ける）、赤埴、諸木野を経由し、石割峠を越えて田口、黒岩へと進む。



松本家で休憩



諸木野関所跡で解説



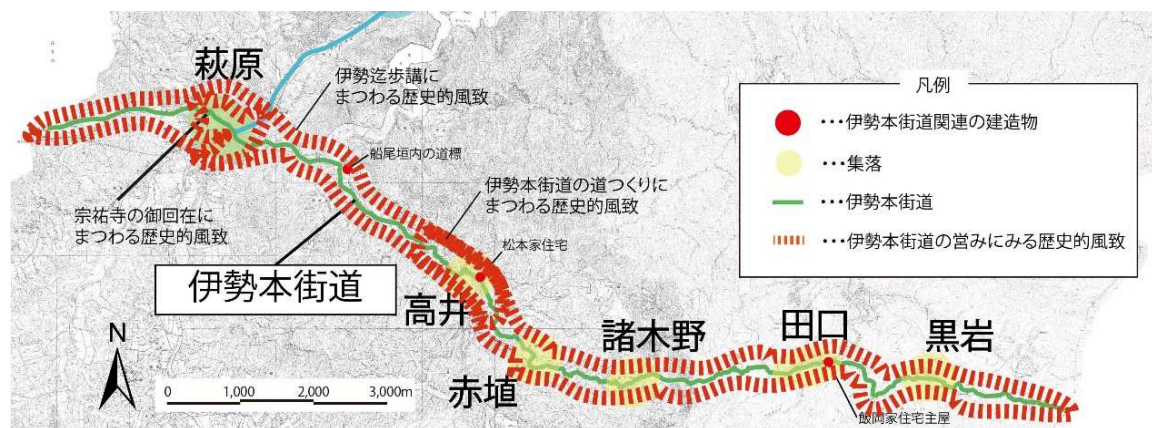
伊勢迄歩講のチラシ

（４）まとめ

大和から伊勢へと続く道の中で、急峻な峠道が多い伊勢本街道。往来する人の増加とともに街道筋に旅籠や商家が増え、参詣者のために道標などが整備された。講を組織して伊勢本街道を通して伊勢神宮へ参拝する活動や、こうした

²⁴ユースホステル運動は、ドイツの小学校教師リヒャルト・シルマン（1874 年生～1961 年没）が提唱した運動で、自力による簡素な野外旅行活動を通じて青少年を健全に育成することを目的とし、青少年の旅に安全かつ安価な宿泊場所を提供しようという趣旨で始まった運動である。それにより生まれた宿泊施設がユースホステルで、この運動は世界約 80 の国と地域に広がっている。

人が通行しやすいように道の草刈り等を行う「道づくり」が当時の面影を残す古道や集落を舞台に続けられているほか、縁台を出して休む場所を提供する、お茶やお菓子のお接待を行う、などの「おもてなし」もあちこちで見ることができる。見知らぬ他人を思いやり、迎え入れる活動が歴史的環境と相まって、良好な歴史的風致を形成している。



伊勢本街道の営みに見る歴史的風致の図

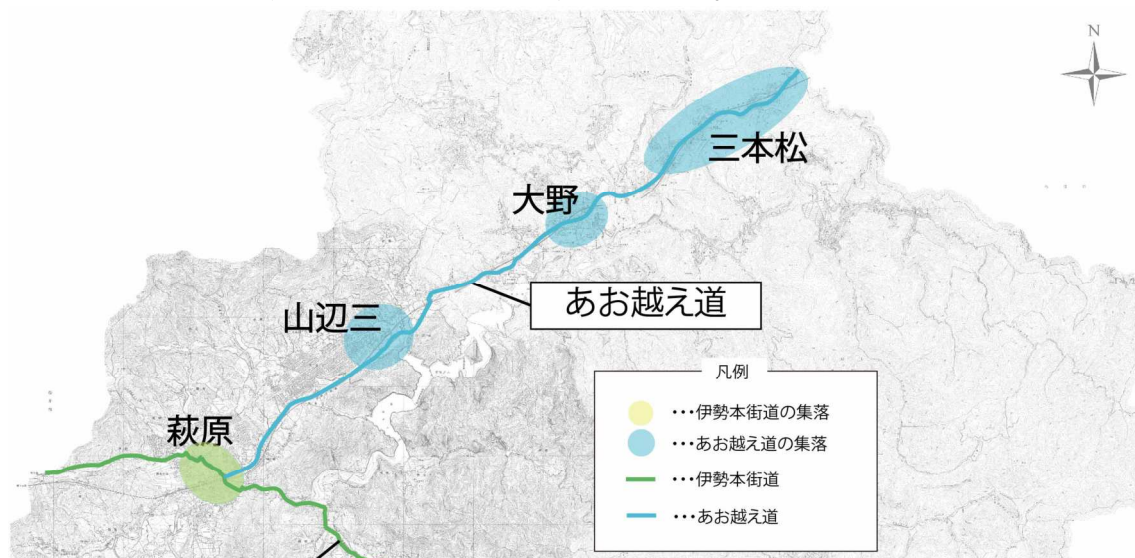
2-3 あお越え道沿いの集落の 営みにみる歴史的風致

(1) はじめに

萩原の分岐点から北東へ分岐した道は、額井岳南方の山麓沿いに福地・長峯・山辺三・大野・三本松を通して名張・青山へと抜ける。萩原の札の辻に建つ道標（文政十一年建立）北面に「左あをこ江みち」と刻まれているが、「あお越え道」「伊勢表街道」「初瀬街道（伊勢から大和へ向かう場合の呼称）」とも呼ばれた道である。萩原から、福地、長峯、山辺三、大野、三本松と沿線に集落が発達している。

伊勢本街道に比べて山道が緩く少ないので、女性や子供が歩きやすい道として認識されており、参宮層の広まった近世末から利用者が本街道を上回るようになった。参宮急行本線の開通や自動車交通の普及に伴う道路整備の推進と相まって、近世の旧道は大部分が消滅・形状変更しているが、ところどころに往時の面影を読み取ることができる場所が残っている。

例えば、長峯にある観音寺へ案内する石の道標や、山部赤人墓への分岐点にある石の道標、伊勢街道沿いに佇む濡れ地蔵が残り、遠方から訪れる旅人に対する近隣の観光名所の道先案内を行っていた痕跡があるほか、町内安全と旅の安全を願う行事として、地蔵会式が現在も続いている。



あお越え道のルートと集落の分布

(2) 建造物

【濡れ地蔵】

石造、磨崖仏。巨岩の表面を船形に掘りくぼめ、地蔵菩薩立像が彫られている。後背部右側に「建長六年甲寅八月十五日建」と陰刻されている。もとは背後の山からしみ出る水の影響で常に濡れていたことから、濡れ地蔵と呼ばれるようになったと伝わる。

旧伊勢街道沿線にあるため、この場所を通過する伊勢参りの旅人たちもこの地蔵を拝んでいたと推察でき、地蔵の周囲には宿屋が並び、「地蔵前」と呼ばれて賑わっていた。

現在は室生ダムの西端に位置するため、周囲に建物はなく、冬から春にかけては水中に沈んでいる。

秋の彼岸に、山辺三の集落で地蔵会式が執り行われている。



濡れ地蔵の前に伊勢街道が通っていた



後背部右側に刻銘がある

【大野宿の常夜灯】

石造。大野宿は、萩原から分岐し、山辺の次の宿場町である。旧街道に面して建てられ、常夜灯の竿石の正面に「村内安全」「両宮大神宮」、背面に「安永六年（1777）」と刻まれている。

入母屋の笠で宝珠がないのが特徴である。



大野宿の常夜灯

【三本松の常夜灯】

石造。三本松は、大野宿の次の宿場町にあたる。現在も旧旅籠の建物が点在し、往時の雰囲気を感じることができる。常夜灯は、旧道から少し離れた広場に安置されている。常夜灯の竿石側面に「嘉永三年（1850）庚戌二月建立」と刻まれている。かつては街道沿いに建てられたが、戦前、地震の際に倒れたことから現在の場所へ移されたと伝わる。

宿場町として栄えていたころは、灯明の油は周辺の宿屋で分担した。現在は灯明をともしていないが、道づくり（集落の共同作業で行う道路の草刈り・清掃等）の際に手入れをしている。



三本松の常夜灯

(3) 活動

【濡れ地蔵の供養】

毎年、秋のお彼岸に濡れ地蔵会式が行われている。山辺三自治会が主催し、町内の安全と道行く旅人の安全を祈願し、山辺三に所在する西方寺住職の読経の中、参列者全員による焼香が行われたあと、車座になって鉦を鳴らしながら大きな数珠を全員で回す「数珠繰り」が行われる。数珠繰りに使った数珠で背中を撫でてもらうと、健康長寿の御利益があるといわれる。会式ではお供えを持ち寄り、数珠繰りが終わったあとで世帯ごとに分配して持ち帰る。

現在の濡れ地蔵前は、ダムの上に沈むため周囲に何もない状況であるが、室生ダムが建設される前から続いている法要である。昭和44年(1969)5月26日付け大和タイムスによると、「毎年8月24日には地元の人たちが供養を続けてきた」とあり、このころには法要が行われていたことがわかる。



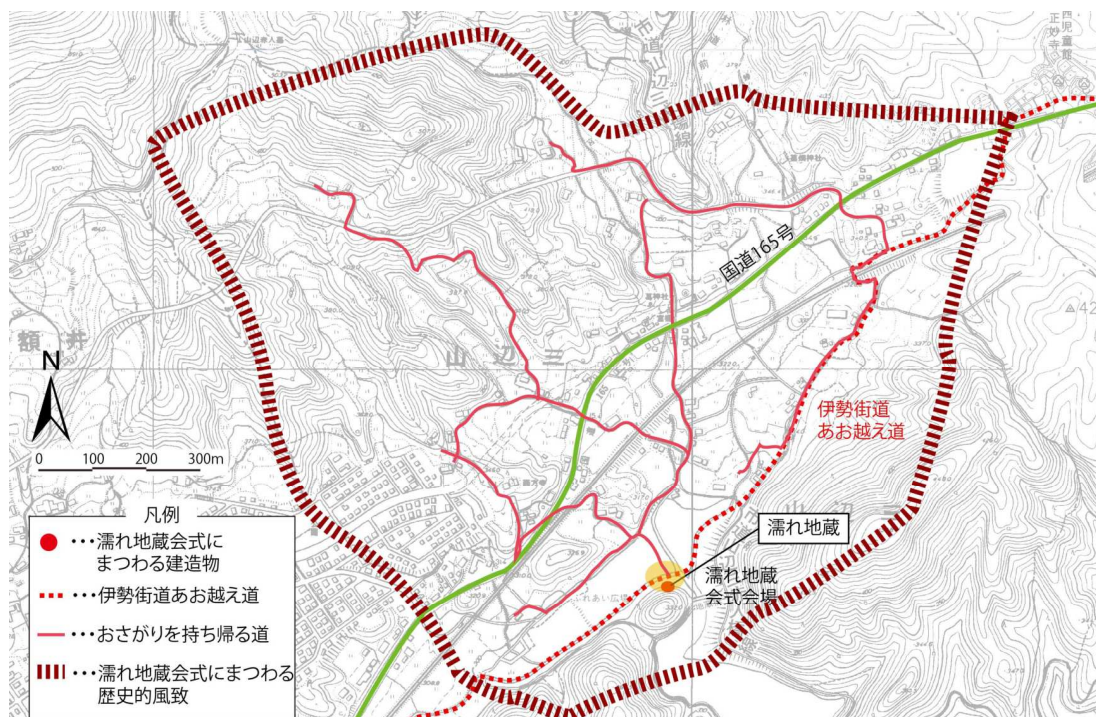
数珠繰りの様子



背中を撫でる



数珠を納める箱の蓋の裏



濡れ地蔵会式にまつわる歴史的風致

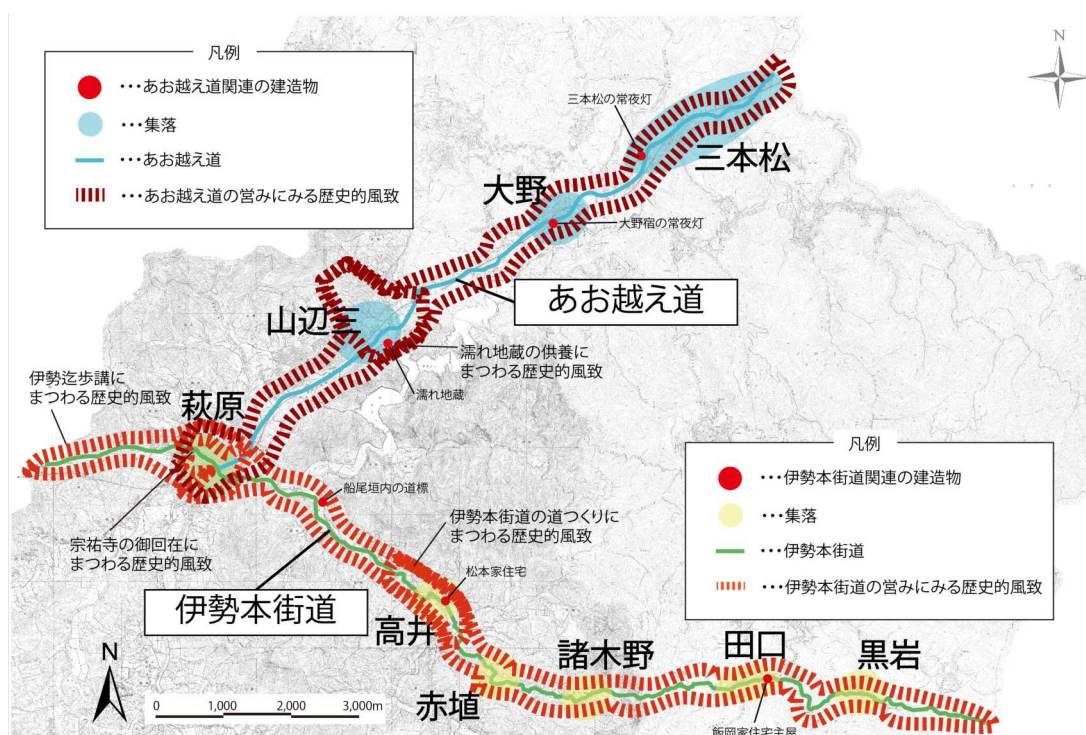
(4) まとめ

あお越え道（伊勢表街道）は、伊勢本街道に比べてなだらかな道が多いことから利用者が増え、近世末には伊勢本街道を凌ぐ通行量であった。利便性の高さから、鉄道が通り国道が整備され、その面影を残すところは限られている。町家群や石造物などの歴史的環境を舞台に、道行く人々の旅の無事を祈る行事が相まって、良好な歴史的風致を形成している。

おわりに

奈良盆地から伊勢へと通じる重要な街道として発達した伊勢街道は、宇陀市榛原萩原で距離が短く険しい伊勢本街道と、比較的なだらかで歩きやすいあお越え道に分岐する。街道沿いの旧宿場町は、集落ごとに往時の面影を残しており、道標や常夜灯は現在も伊勢への道を示している。

江戸時代の人々の追体験として続く徒歩での参詣と、参詣客をもてなすための道の整備や道中の安全への祈りを込めた行事が、伊勢街道沿線に残る歴史的環境を舞台に繰り広げられており、良好な歴史的風致を形成している。



伊勢街道の旧宿場町にみる歴史的風致の図

3 宇太水分神社の祭礼行事に みる歴史的風致

(1)はじめに

宇陀市の東南部に位置する菟田野は、四方を山に囲まれ、東西に流れる芳野川に沿って集落が点在する地域である。

菟田野は古代、菟田下^{うだのしもつあがた}県に属し、その中心があったと考えられている。『古事記』・『日本書紀』で舞台となった宇賀志をはじめ、古墳時代前期初頭の古墳群「見田・大沢古墳群²⁵」を擁する歴史資源豊富な土地柄であるほか、古くから水銀の産地として認識されていた。

宇太水分神社は、芳野川と四郷川^{しごうがわ}の合流点付近に位置し、背後には鎮守の杜と水銀鉱山跡がある。中世は興福寺の荘園となり、春日神社と深い結びつきを持っていたほか、鎌倉時代末期に後醍醐天皇の勅により本社が再興され、その社殿は修復を重ね現在まで受け継がれてきた。

この水分神社を中心とした祭礼行事は、中世から始まったとされ現在でも続けられている。また、神社の門前は在郷町として賑わい、近隣に暮らす人々の生活とともにあった。

芳野川と四郷川が合流する場所は、古くから水害が多く、被災と復旧を繰り返してきた。中でも昭和34年(1959)の伊勢湾台風では、菟田野地域のほぼ全域に被害が及んでいる。この影響で、昭和37年(1962)から神輿と大名行列形式のお渡りが休止に追い込まれ「御幣渡り」^{ごへいわた}のみの秋祭りとなったが、平成2年(1990)の地方創生事業を契機に菟田野太鼓台保存会が結成され、本来の秋祭りの姿に戻すことができた。

令和2年(2020)、令和3年(2021)はコロナウイルス感染症の影響で、再び「御幣渡り」のみの形式による秋祭りの開催となったが、その間に太鼓台の修理等のメンテナンスを行い、次の秋祭りには出られる状態に整えている。

現在でも宇太水分神社の秋祭りに照準を合わせた暮らしは受け継がれている。

菟田野には「宇賀志」「菟田高城」「血原」など、『古事記』『日本書紀』に登場する地名がいくつも残り、古代から宮廷との関りが深い土地柄であったことが

²⁵ 見田・大沢古墳は、西日本各地で大型前方後円墳が造られるようになる古墳時代前期初頭の古墳群で、橿原考古学研究所発行の『宇陀 悠久のとき』には方形台状墓群とあり、1号墳は前方後方墳状に張り出し部が突出した異例の形をしている。辰砂(水銀朱)生産との関係性についても注目される。宇陀市の古墳の発生時期を迎えるうえで貴重。

うかがえる。その理由のひとつとして、県^{あがた²⁶}の設置がある。『日本書紀』、神武東征条によると八咫鳥に導かれた神武一行は、熊野から菟田^{うだのしもつあがた}下^え 県^{うかし}に達し、そこを菟田^{うだのうかちのむら} 穿^え 邑^{うかし}と名付けたという。また神武は菟田県の首領である兄^え 猾^{うかし}・弟^{おとうかし} 猾^{おとうかし}を召したが、兄猾は従わなかった。弟猾に菟田県主として菟田邑が与えられ、宇陀の水取^{もひとり}等の祖となった、と記される。宇陀県の首長であった宇陀県主^{もひとり}が、のちには主^も 水^{ひとり} 部として王権に水や氷を献上するようになった。

中世には、このあたり一帯は興福寺領となる。宇太水分神社のあった西殿荘は、春日社記録『中臣祐定記』によると、寛喜元年（1229）に春日若宮御節供料所として、その存在を確認することができる。

南北朝戦国期には南朝方を庇護した伊勢国司北畠氏のうしろ盾を受け、国人領主の沢・秋山・芳野・小川氏が台頭し、領地をめぐって争いを繰り返していたが、のちに武力衝突を避け話し合いで処分を決めるため「宇陀郡内一揆」が組織された。4氏は、宇太水分神社の神水を飲み交わしてこれを守ったが、天文6年（1537）芳野春竹丸が沢氏に宛てた文書から、秋山氏が離反し、その実質を失ったことが伝えられている。領主は宇陀松山と同じ変遷を辿り、元禄8年（1695）より幕府の直轄地となった。

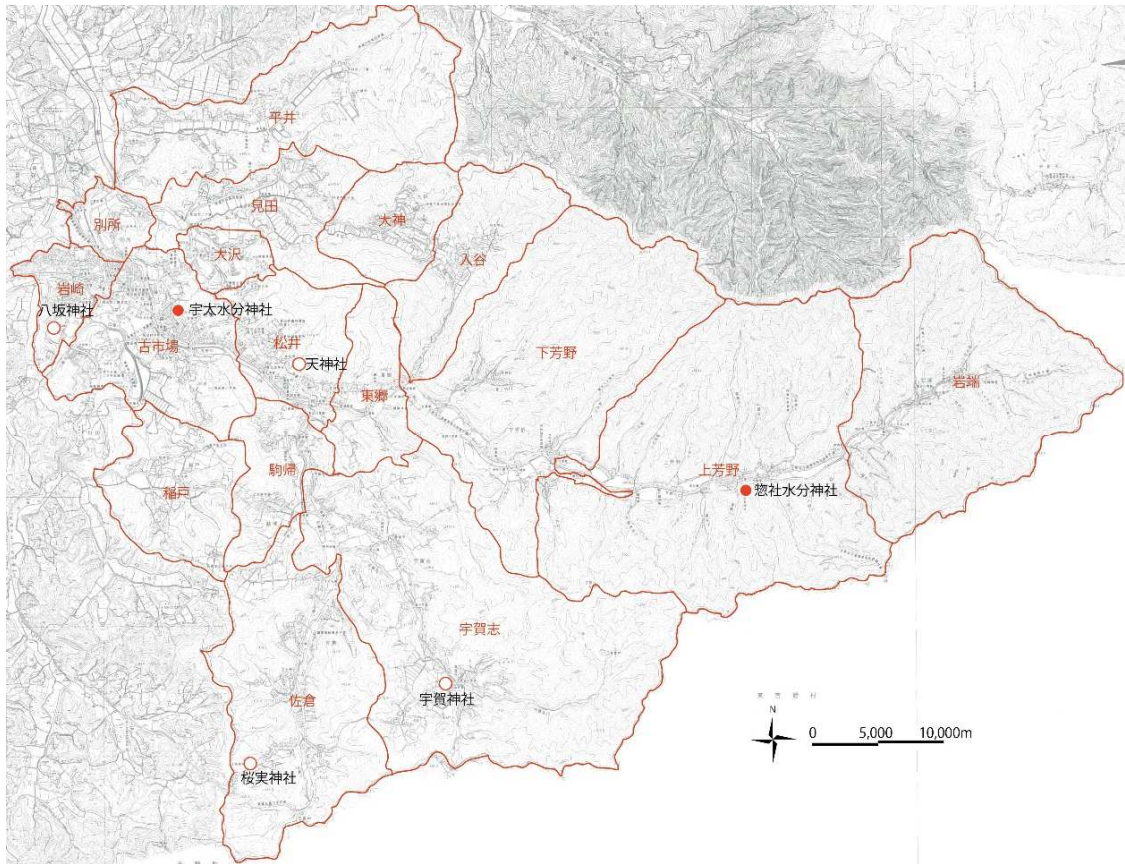
西殿荘の市は、熊野・伊勢・大和を結ぶ交通の要衝地で、古代・中世を通じて繁栄した。年号不詳の『沢氏古文書²⁷』に、「うたの市」の記述があり、9日に市が立つことと、周辺の村人が集まり賑わっていたことがわかる。文禄4年（1595）の検地帳には既に「古市場」と記されており、このころには宇陀松山へ市が移ったとみてよい。そのごは古市場村周辺の在郷町となり、米や柿などの作物のほか、近隣の町の商人と株仲間を組織し、絞り油、藍染、煙草等の品々を扱っていた。薬草については、薬種問屋が多くいる松山町へ直接持ち込み、葛は花見客をあてこみ吉野へ売りに行っていた。

江戸中期以降、旱魃や自然災害により飢饉が続き、農村部では離村する者が多かった半面、町場的な発展を遂げつつあった古市場の人口が増加した。こうしたことから、古市場は近世以降も賑わいを見せていたことがわかる。

また、江戸末期から農閑期に行っていた毛皮革^{なめ}の鞣しが、明治中期から盛んにおこなわれるようになり、主要産業となった。

²⁶ 県は、王権が設定した地方行政制度の単位で、畿内およびその周辺地域や吉備・筑紫などに分布している。王権が瀬戸内海ルートを中心に勢力を拡大していく過程に対応すると考えられるので、4世紀代から5世紀前半までにはほぼ設置されたとみられている。

²⁷ 東吉野と接する佐倉の「たふい山」を巡って、佐倉と谷尻で争論となり、沢氏が調停役を務めたことを示す古文書。損害を受けた佐倉から、等価の犠牲として谷尻惣庄の手による犯人の成敗を求めているが、これができなかった場合は、佐倉の者が明日のうたの市にて谷尻の人を無差別に襲う、と書かれている。



菟田野地域の地名と宇陀水分神社・惣社水分神社の位置

明治 22 年 (1889)、町村制の発布に伴い、近隣の村が合併²⁸し「宇太村」^{うだむら}「宇賀志村」が誕生する。昭和 31 年 (1956) に両村が合併し、菟田野町となった。

昭和 34 年 (1959) 伊勢湾台風により川が氾濫し、殆どの世帯が被災した。昭和 34 年 (1959) から昭和 37 年 (1962) にかけて災害復旧事業が行われ、川幅の拡張、護岸工事の徹底により景観が大きく変わった。また、昭和 37 年 (1962) を最後に、秋祭りの神輿渡御と大名行列形式のお渡りが休止され、御幣渡りの形式で続けられていた。

この状況に転機が訪れたのは平成 2 年 (1990)、「ふるさと創生事業」で各地方公共団体に交付された一億円の使途について協議した結果、6 項目の提言の中で「お渡りの復活」が盛り込まれ、神輿のレプリカ製作や衣装・道具の新調に活用された。こうして宇太水分神社秋祭りのお渡りは再開されることになった。

²⁸古市場村、松井村、大神村、見田村、大沢村、別所村、平井村、岩崎村が合併し「宇太村」に、^{いなと}稲戸村、^{こまがえり}駒帰村、^{さくら}佐倉村、^{うかし}宇賀志村、^{いわはし}岩端村、^{かみほうの}上芳野村、^{しもほうの}下芳野村、^{にゅうだに}入谷村、^{とうごう}東郷村が合併し、「宇賀志村」、となった。



古市場の町並み



ゆるやかに曲がる道

菟田野地域には、惣社水分神社と宇太水分神社が鎮座する。五穀豊穰を守護する農耕の神として信仰を集め、その名の通り水を司る神である。

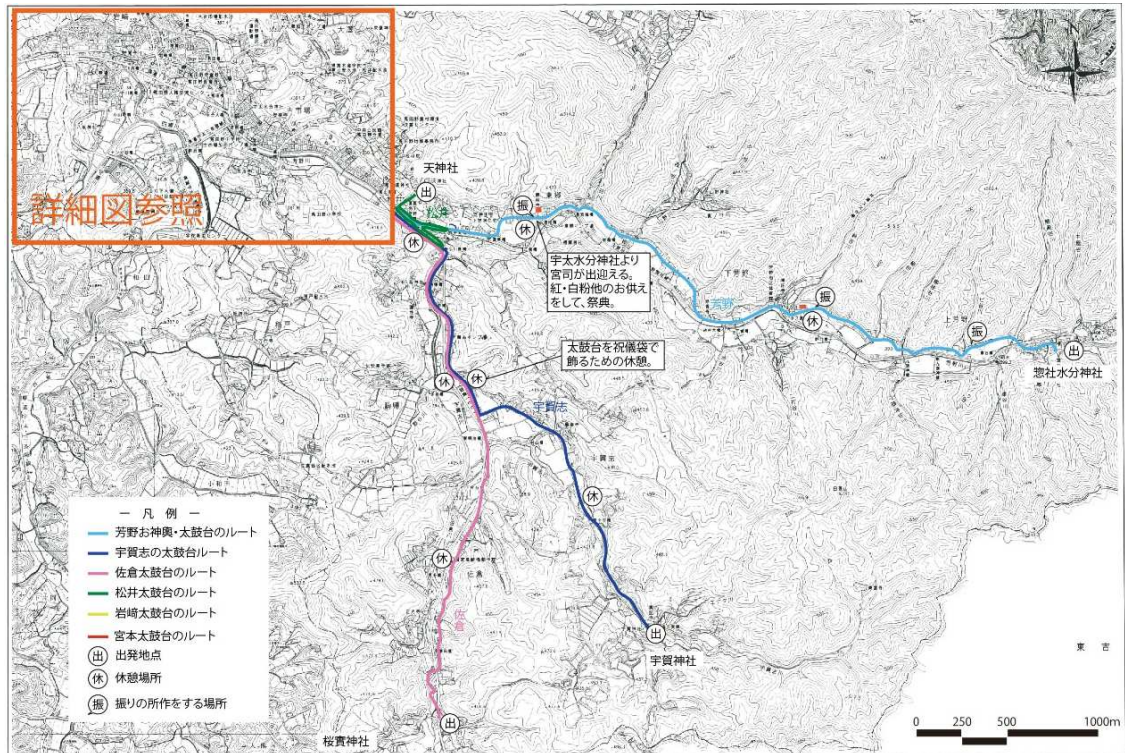
『延喜式』の「祈年祭」・「6月の月次」祝詞によると、稲を奉ることに関わらせて「水分に坐す皇神等の前に白さく、吉野・宇陀・都祁・葛城と」とあり、平安時代には既にあったと考えられている。

宇陀の水分神社は本来一社のはずであるが、宇陀郡内には水分神を祀る神社は10社ある（表2-1）。このうち、①②③は、宇陀の水分神社のうちでも中心的な神社で、芳野川の上流・中流・下流にそれぞれ鎮座している。特に①②の宇太水分神社は、平安後期には上宮・下宮として口宇陀全体に広がる社領を二分していた。③の惣社水分神社も芳野川上流にあって芳野氏の勢力拡大に伴いその影響力を強めた。④⑤の水分神社は、それぞれの地元では③から分祠されたと伝わるが、永禄3年（1560）『玉岡水分縁起』では、①から末社として勧請されたと記している。

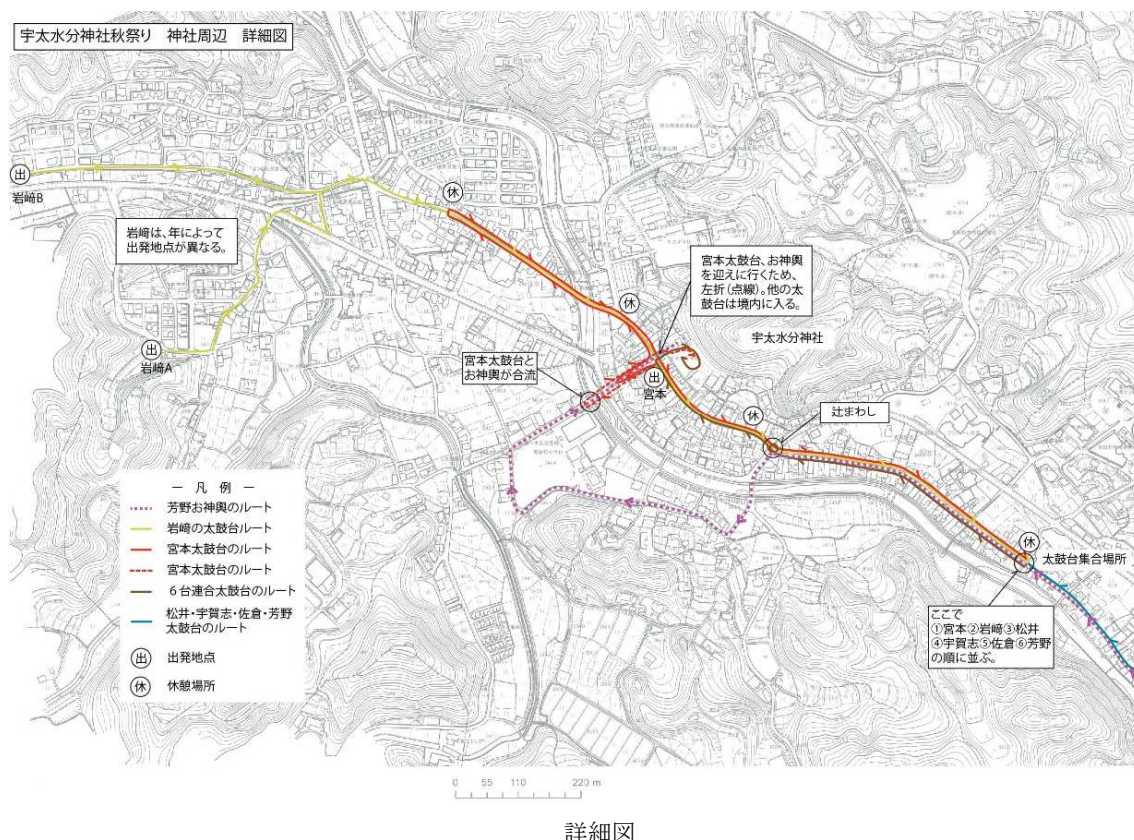
宇陀市内に分布する水分神社一覧

	名称	場所
①	宇太水分神社	菟田野古市場字菟田野
②	宇太水分神社	榛原下井足字水分山
③	惣社水分神社	菟田野上芳野字中山
④	水分神社	大字陀平尾字宮ノ谷
⑤	水分神社	室生下田口字田口西
⑥	春日神社 (旧名水分神社)	菟田野美田字水分
⑦	平尾神社 (平尾水分神社)	大字陀東平尾字宮野谷
⑧	水分神社	大字陀迫間字子守 (明治41年阿紀神社に合祀)
⑨	御井神社	榛原檜牧字高取 (祭神四柱註に水分神あり)
⑩	阿蘇神社	菟田野平井字阿蘇 (祭神四柱註に水分神あり)

菟田野の秋祭りは、旧暦 9 月 21 日に実施していたが、現在は月遅れの 10 月 21 日に最も近い日曜日に開催される。③惣社水分神社の女神様が、①宇太水分神社の男神様のところへお渡しをする行事で、このときに芳野川流域の郷社役員も一同に会する場になっている。この行事の中核をなす、惣社水分神社から宇太水分神社へのお渡りの行事と、芳野、宮本（古市場）、岩崎、宇賀志、佐倉、松井の太鼓台巡行の行事について紹介する。



宇太水分神社秋祭りに集まる太鼓台のルート



(2) 建造物

【宇太水分神社本殿】国宝

木造、一間社隅木入春日造、檜皮葺、棟木銘より元応2年（1320）創建）。三棟の社殿が並び、屋根が一体化した形が珍しい。外部は彩色が施され、細部彫刻は精巧につくられている。

毎年、五穀豊穡を感謝し、秋の例大祭でこの神社境内に神輿と太鼓台が集まり、豪壮な引き回しが披露される。



宇太水分神社本殿



末社春日神社本殿

【宇太水分神社末社春日神社本殿】重要文化財

木造、一間社隅木入春日造、檜皮葺。本殿と同様に彩色と彫刻が施されている。建立の時期は不詳だが室町中期の建立と推定される。本殿の隣に鎮座し正面に神門を置く。本殿・宗像神社とともに瑞垣で囲まれている。

【宇太水分神社末社宗像神社本殿】重要文化財

木造、一間社流造、檜皮葺。建立時期は不詳だが室町末期の建立と推定される。本殿と同様に彩色と彫刻が施されている。春日神社本殿同様、正面に神門を設け本殿とともに瑞垣に囲まれている。



末社宗像神社本殿

【惣社水分神社本殿】

木造、三間社流造、銅板葺。菟田野の東に位置し、小高い丘の上に社殿がある。『大和国神社明細帳』（奈良県庁文書/明治12年（1879））では「本殿の規模は桁行壱間貳尺五寸、梁行壱間貳尺」とある。現存する建物と同じ規模で柱等の部材が相応に古いことから、このころには既にあったと推察される。秋祭りにはここから神輿と太鼓台が発し、古市場の宇太水分神社を目指す。



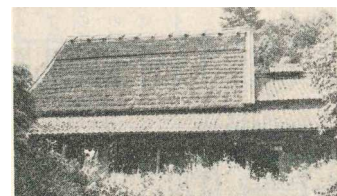
惣社水分神社本殿

【藤村家住宅】

木造、平屋建、大和棟造、茅葺一部棧瓦葺。惣社水分神社から古市場へ向かう道中で最初の休憩所となる。『菟田野町史』（昭和43年（1968）/菟田野町史編集委員会）に写真が掲載されており、屋根をトタンで覆うなどの変化はあるが現在と同じ姿で写っており、柱等の部材が相応に古いことから、少なくともそれ以前の建物と推察される。。



藤村家住宅



昭和43年（1968）当時の藤村家住宅

【勝林寺本堂】

木造方三間庇付仏堂、入母屋造、棧瓦葺。東郷にある古刹で、お渡りのときにこの寺院の前で祭典が行われる。紅と白粉が供えられ、ここで女神様はお化粧直しをされている。昭和34年（1959）の伊勢湾台風の被災状況を示す写真に鼓楼と本堂が現在と同じ姿で写っており、柱等の部材が相応に古いことから、少なくともそれ以前の建物と推察される。



現在の勝林寺



昭和34年（1959）当時の写真

^{こめたに}
【米谷家住宅】

木造一部三階建、入母屋造、棧瓦葺。複雑な屋根の形をしており、主屋は中塗り土仕上げ。もとは造り酒屋で、敷地内にいくつも蔵がある。現在は住宅。

大宇陀町が昭和 46 年（1971）に撮影した航空写真に現在と同じ状況の屋敷配置で写っており、このころには建てられていたことがわかる。太鼓台巡行のときにこの家の前が休憩所になっている。



米谷家住宅



大宇陀町が撮影した昭和 46 年（1971）航空写真

【桜実神社本殿】

2-1（2）建造物を参照。

【宇賀神社灯籠】

宇賀神社は、菟田野地域の南東に位置し宇賀志の集落の中央、宇賀志川沿いの僅かな平坦地にある。

『大和國宇陀郡神社明細帳』（奈良県庁文書/明治 12 年（1879）、追記あり）によると「村社、由緒不詳、祭神は茅宇迦斯神魂」とある。

本殿は一間社春日造、銅板葺で、境内の一番奥に鎮座している。拝殿は桁行三間、梁間二間の切妻造銅板葺で境内の中央に配置されている。本殿の手前にある石灯籠の側面に天保十五甲辰年（1844）と刻まれている。



宇賀神社石灯籠

鳥居の軸線上に拝殿、その奥に本殿が配され、南側に太鼓台を格納する倉庫と社務所がある。境内の北側には、役小角の石像や山の神、子もうけ石が置かれている。

【八坂神社灯籠】

八坂神社は、菟田野地域の西、岩崎にある。『大和國宇陀郡神社明細帳』（奈良県庁文書/明治 12 年（1879）、追記あり）によると「村社、由緒不詳、祭神は須佐之男命」とある。

八坂神社は、集落の南西の丘に位置し、中腹に設け



八坂神社石灯籠

られた鳥居をくぐり石段を登ると広場に出て、その先に拝殿、拝殿の奥に本殿がある。

本殿は木造一間社春日造、銅板葺きで、境内の奥で一段高い場所に建っている。本殿・拝殿が造営された年代は不明だが、拝殿脇の石灯籠は笠が入母屋造で、宝珠がない。側面に昭和8年（1933）7月建立と刻まれているほか、狛犬の台座にも昭和8年（1933）と刻まれおり（狛犬本体は後世のもの）この時期に大規模な造営があったことが伺える。秋祭りでは麓が太鼓台巡行の出発点になる。

【辻村家住宅】

木造二階建、片側入母屋造、銅板葺。大正12年（1923）（市課税台帳による）に建てており、内科医院兼住居として使われていた。

この建物の背後に辻村病院ができ、現在は辻村家の専用住居となっている。秋祭のお渡りや太鼓台巡行の一行は、この建物の前を通過する。



辻村家住宅

（３）活動

【半夏生祭】 はげっしよさい

惣社水分神社では7月2日、半夏生祭が行われる。このとき、宇太水分神社の宮司と氏子役員が惣社水分神社を訪ね、惣社水分神社の半夏生祭の祭典が終わったあとに社務所へ上がり、惣社水分神社の役員の顔合わせと、秋祭り開催の打診をする。惣社水分神社側は、打診を受けて月末までに宇太水分神社へ訪れて、受諾の挨拶を行う。これを受けて9月下旬より、打合せや所作の練習等、秋祭りの準備に入る。



半夏生祭の後、両神社の役員が顔を合わせる

【例大祭】

例大祭は、10月21日に近い日曜日に開催される。祭の前日、郷社（惣社水分神社、東郷、入谷、駒帰、佐倉、稲戸、ほか）で宵宮の祭典と御供まきがあり、唯一宵宮をしない宇太社では当日の準備を行う。一方で、惣社水分神社でも花籠づくりや衣装合わせなどの準備が進められる。

この祭りで特徴的なものは「大名行列」と「御幣渡り」で、「大名行列」は現在、先導一小櫛13人一小鉾一立傘一台傘一弓2人一鉄砲2人一薙刀一赤槍一次

槍一黒塗御幣一白塗御幣 3 人一拍子木一手振 2 人一
 先箱（挟箱）^{はさみばこ} 2 人一槍振 11 人一槍振警護 2 人一花
 籠 4 人一花籠警護 2 人一大鉦一獅子頭 2 人一太鼓打
 2 人・太鼓持ち 2 人一で構成され、拍子木の合図で
 それぞれ順に振りが行われる（右写真）。『総社水分
 神社縁起 下書』（慶長 2 年（1579）/惣社水分神社
 所蔵）によると当時のお渡りの行列は、「長柄十一筋
 一花籠一鼻高鉦一面二枚一櫛十本一御幣二本一鹿頭
 一太鼓一神輿・善綱一祢宜（騎乗）一乗尻七騎（芳
 野四騎、駒帰・佐倉・松井各一騎）」とあり、槍 11
 本は中世からの伝統であることがわかる。

右写真のように、砂を盛った場所で所作をしながら
 「振り」（手振りはゆっくり左足を出しながら左
 手を伸ばし肩の高さに上げたのち片足立ちとなり、
 右足を出しながら左手を額の前にかざす動きを繰り
 返す。うしろに続く鉦箱 2 人は箱を揺らしながら大
 きく左右に動き、さらに続く槍振りは手振りの動き
 にあわせて左右に動きながら毛槍を上下させる）を
 行い、旧道を進み、4 箇所のお旅所で祭典と休憩を
 繰り返し、宇太水分神社を目指す。

本祭当日、朝 8 時から惣社水分神社神輿前で出発
 祭があり、そのあとお渡りが始まる。惣社から宇太
 社までの約 6 km の道のりを、宇太社へ到着するま
 でに「お旅所」を含む特定の場所で道中 9 回の「振
 り」があり、これを見るため見物客が沿道に集まる。
 「お旅所」は旧家の前や寺の前に設けられている。

一方、宇太社では 10 時頃から祭典が行われる。
 午後からお渡し一行の接待をするため、早めに祭
 典をする。

10 時 40 分頃、お渡りの一行が東郷の勝林寺前
 のお旅所に到着する。この場所は旧宇賀志村の西境で、
 宇太社までの中間地点である。ここで宇太社と郷
 社の氏子が惣社のお渡し一行を出迎える。

神輿は旧道への入口に置かれ、神饌が神輿の前に



上芳野 鳥居垣内で二度目の振り
祭典はなし



手振、先箱、槍振りと続く



旧道を歩く



お旅所での祭典



最初のお旅所、藤村家

並べられる。ここで一行は食事を取りしばらく休憩となる。

11時10分頃、準備が整うと、宇太社宮司を先頭に古市場垣内長・郷社の代表が列をなして大宿所を出て、お旅所に向かう。一行が神輿前に到着し整列すると、祭典が始まる。

まず、宇太社宮司から惣社宮司へ、^{べにこ}紅粉と^{おしろい}白粉の特殊神饌が手渡される。惣社宮司はそれを檜扇で受け、神輿前へ供える。現在は市販の化粧道具（口紅、白粉、筆、栗袋）を白紙で包み、麻紐で縛ったものである。これは、古市場は男神、芳野は女神であり、女神が東郷で化粧直しをするため、男神から供えられるものと伝わる。

祭典はそのあと、二人の宮司による祝詞奏上・出迎えの一行の拝礼・撒饌で終了する。そして、振りが行われたのち、宇太社宮司を先頭に、古市場の垣内長と御幣を持った郷社の代表が先供、惣社一行が後供となって出発する。

お渡り一行は、大宿所前から新道へ出て芳野川沿いを西に進み、松井橋の交差点を直進して旧市街地に入る。すぐ先に三つ辻があり、そこにすべての太鼓台が集合すると、太鼓台は岩崎・古市場・松井・宇賀志・佐倉・芳野の順で旧市街地を古市場方向へゆっくりと進んでいく。お渡りの一行はそのあとに続く。

12時ごろ、お渡りの一行が天神社前のお旅所に到着すると神輿の前で祭典が行われる。修祓、献饌、祝詞奏上、玉串奉納、撒饌の流れで祭典が終わると、振りをを行い出発する。

古市場の地蔵の辻の交差点にさしかかると、太鼓台は辻まわしをしたあと直進して旧市街地経由で宇太社に向かい、到着すると順次境内で引き回される。

一方、お渡りの一行は地蔵の辻から南に曲がって芳野川を渡り、菟田野中学校の角から宇太社の正面



化粧道具の特殊神饌を手渡す



ここでも振りが行われる



辻まわし



太鼓台の宮入り

にまわる。宮前橋の手前で郷総代らの出迎えを受け、宮前橋の側にある鳥居の脇で待機する。

次々と太鼓台が境内で引き回されるなか、最後に古市場の旧市街地を進んできた芳野の太鼓台は宇太社前からお渡り一行が待機しているところまで進み、お渡り一行を先導しつつ境内に入り、引き回される。

13時30分頃、お渡り一行が宇太社に到着する。振りをを行い境内に入場する際、花籠役が花籠の先端に繰りつけられた紙袋を竹の棒で破り、中の切り紙を撒き散らして境内を祓う。

拝殿脇の神輿を安置する場所でもう一度振りをを行い、神輿はいったん拝殿の中に入れられ、宇太社宮司の拝礼を受けると拝殿裏から運び出されて夫婦杉の前に安置される。

祭典は宇太社本殿前と神輿前とで別々かつ同時に行われる。まず、芳野・宇賀志など各郷社の役員が持参した御幣が、古市場の垣内長の手渡しにより本殿の中央殿へ上げられ、扉の両脇に立てかけられる。惣社の神輿前には、立札、大榎、白幣、金幣が立てかけられ、獅子頭が唐櫃から出されて安置され宇太社からの神饌が備えられる。

次に、宇太社宮司は本殿前で、惣社宮司は神輿前で同時に祝詞を奏上する。祝詞が終わると惣社宮司は宇太社本殿に、宇太社宮司は神輿前に移動し、再び祝詞を奏上する。祭典は14時過ぎに終了し、惣社、宇太社はそれぞれ直会となる。

14時30分頃、還御が始まる。直会を終えた郷社の代表は宇太社本殿から御幣を下ろしてもらい持ち帰る。芳野の太鼓台が最後の引き回しをして境内を出ると、それに続いてお渡りの一行も拝殿前で最後の振りをを行い、境内をでる。

太鼓台とお渡りの一行は、旧市街地を通り地蔵の辻の交差点で解散となり、惣社に帰る。

なお、令和2年(2020)から令和4年(2022)まで、コロナ禍のため秋の例大祭では御幣渡りのみ実施し、太鼓台巡行は令和5年(2023)に再開した。



花籠の切り紙を散らす



夫婦杉の前での祭典（令和2年（2020）撮影のため、芳野水分神社の御幣のみで神輿はない）



御幣を本殿へ上げる（令和2年（2020）撮影）



祭典の様子（令和2年（2020）撮影）

【太鼓台巡行】

芳野から神輿と太鼓台が宇太社へ向かっている間、宮本（古市場）、岩崎、松井、宇賀志、佐倉もそれぞれ宇太社を目指す。乗り子（太鼓台に乗り、太鼓を叩く子供のこと。原則、数え年で11歳の子供が乗り子になる。）を乗せて太鼓を叩きながら、進んでいく。尚、乗り子はこの日は神を宿しており、地面に足をつけてはならない、とされているため休憩中は保護者等が肩車をして世話をする。各太鼓台のルートは、104頁から105頁の図のとおりである。

宮本（古市場）は宇太社を出発し、鳥居の下で万歳をしたあと、岩崎の太鼓台を迎えに行く。佐倉は旧宇賀志小学校付近で宇賀志の太鼓台と合流、松井で宮本、岩崎、松井の太鼓台とさらに合流して隊列を整え宮入をする。

旧街道を進み、地蔵ヶ辻に出たときに、辻で太鼓台を引き回す。この地点で神輿のみ川を渡り、中学校前の橋あたり、かつての一の鳥居付近まで進んで宮本の太鼓台が迎えに来るのを待つ。太鼓台が先に境内に入り、入った順に境内前での引き回しをして、休憩しながら神輿が入場する瞬間を見守る。祭典が終わると、順次、郷社に向かい、乗り子を出した家で、それぞれ直会をする。



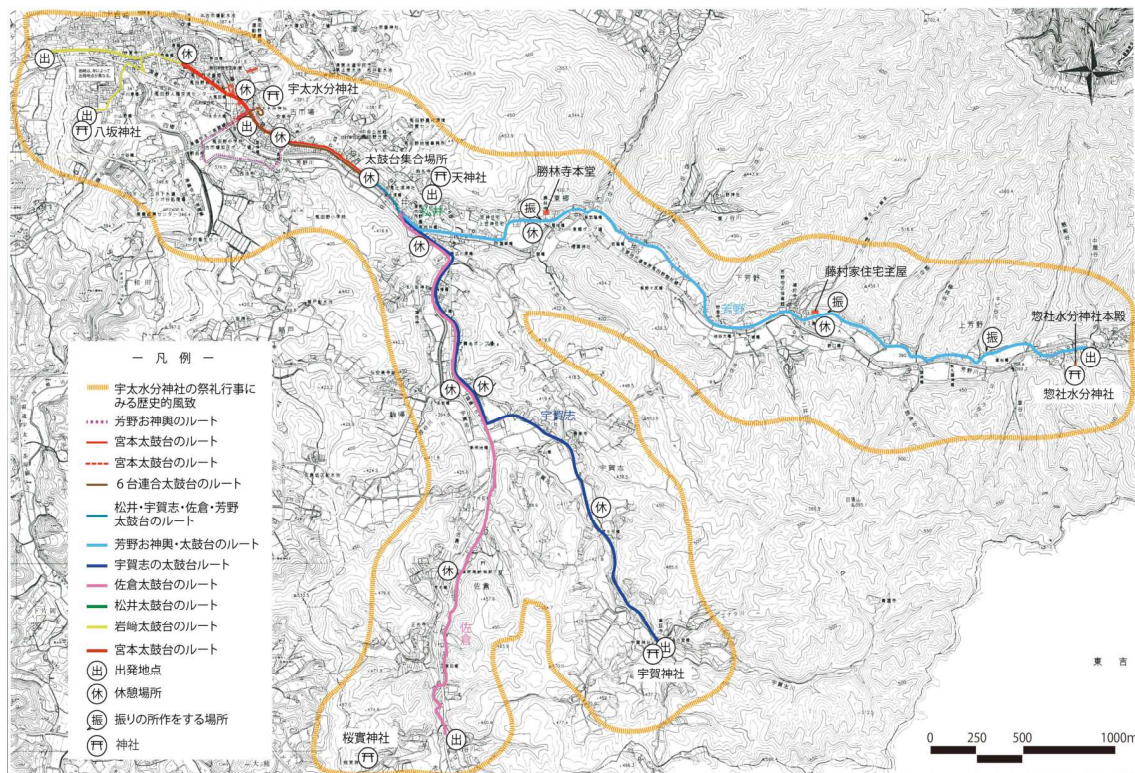
境内での太鼓台引き回し



境内にて休憩、昼食

（４）おわりに

惣社の女神と宇太社の男神の年に1度のお渡りを、菟田野地域の人々はとても大切に暮らしている。この秋祭りのルーツを辿れば中世まで遡るが、そのころと大差ない隊列・所作が現在まで受け継がれている点からも、伝統行事を大切にしようという意図を読み取ることができる。こうした活動が、歴史的建物が建ち並ぶ農村集落や旧街道を舞台に繰り広げられており、良好な歴史的風致を形成している。



宇太水分神社の祭礼行事にみる歴史的風致の図

コラム 2 伊勢湾台風からの復興

昭和 34 年（1959）9 月 26 日、折からの台風接近に伴って芳野川が増水、町内各所で溢水、死傷者 60 名、全流出 20 戸、半壊 101 戸、床上浸水 437 戸の被害を受けた。罹災者の数は 7,148 人に上り、殆どの方が何らかの被害に遭ったとみられる（昭和 31 年（1956）合併時の人口 7,053 人）。そのあと、5 か年に及び復旧事業に取り組んだ。

昭和 37 年を最後に、神輿渡御と大名行列形式のお渡りは休止され、御幣をもって神社へ集まる方式に変えられていたが、平成 2 年（1990）のふるさと創生事業で保存会を組織し、重要文化財に指定された神輿のレプリカ作成と衣装道具一式を詠え、お渡りを再開させた。



伊勢湾台風の被災状況 東郷、瓦礫をよけて稲刈り



河川拡幅工事の風景 (年代不詳)



河川改修事業の際に植えられた桜並木、みくまり桜と呼ばれ親しまれる

4 室生寺周辺の行事にみる 歴史的風致

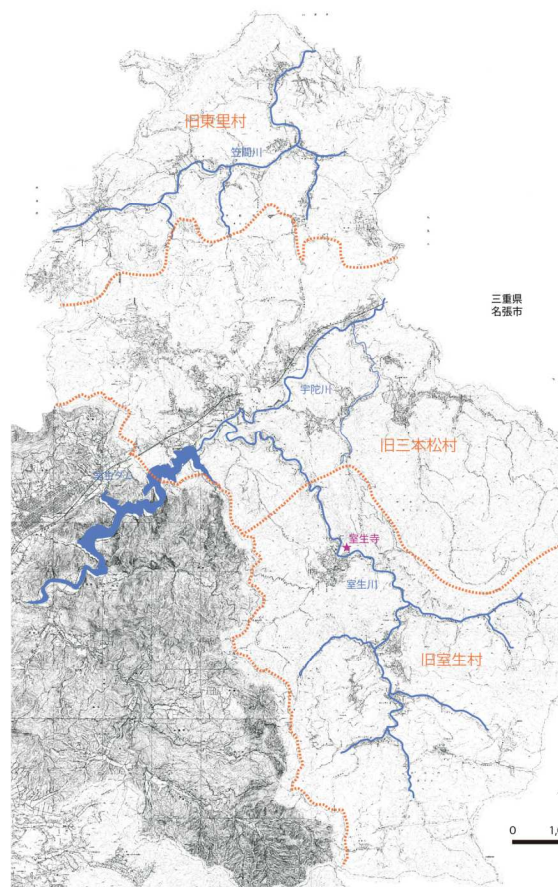
(1) はじめに

宇陀市の東部に広がる旧室生村の区域は山に囲まれ、東西に流れる宇陀川の北と南に集落が展開している。これらは、室生川筋（旧室生村）・宇陀川筋（旧三本松村）・笠間川筋（旧東里村^{ひがしさと}）に分けられる。これらの3つの流域に散在する小扇状地や段丘、高原状の台地は、古くから人が暮らしていたと考えられている²⁹。

このうち、室生川流域は火山活動により形成された地形で、その独特な風貌から古代より信仰の対象となり、祈雨・止雨のほか、病氣平癒など様々な祈りが捧げられた。中でも吉祥龍穴は靈験あらたかな場所として重要視され、その周辺に室生寺や龍穴神社の境内地が整備されていく。

興福寺僧の山岳修行の場として始まった室生寺は、紆余曲折を経て真言宗の寺院となり、現在でも真言宗の行事を中心に信仰の灯を守り続けている。また、護法神の役割を果たした龍穴神社には秋祭りなどの伝統行事が残り、地域の氏子により四季折々の営みが受け継がれている。

ここでは、室生寺とその周辺で現在も伝わる活動について紹介する。



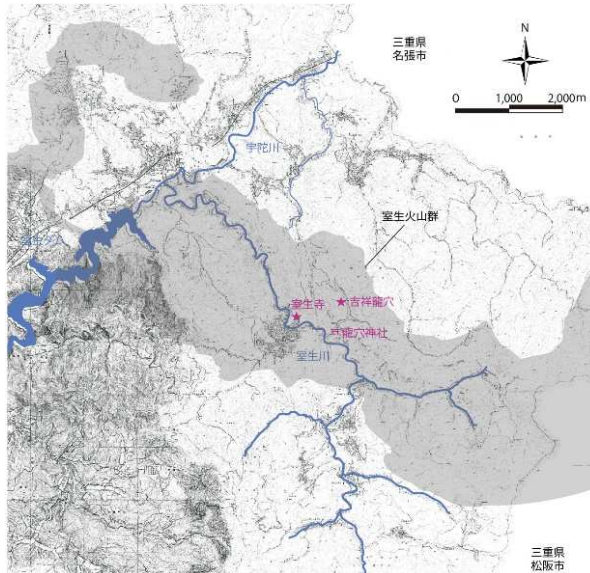
宇陀市における室生の位置図

²⁹ 「大字大野字こおじゅ」から縄文式土器や石器などが出土しているほか、上笠間や向渚、三本松で石鍬・石屑が見つかっており、縄文時代中期（約5000年前）には人の生活があったと推測されている。

宇陀市の東部に広がる室生山地とその周辺は、約 1,400 万年前の大規模な火山活動によりできた火山岩が残り、長い年月をかけて隆起や浸食を繰り返して形成されている。その分布範囲は第 1 章 P13 の図のとおりである。

火山活動により形成された洞窟や独特の岩肌を持つ室生、その地名は「ムロ」・「ミムロ」の意で、太古より神が宿る神聖な地と考えられ、信仰が早くから起こっていた。中でも水源の地として水神信仰が中心となり、雨乞の聖地として認識されるようになった。

ここに、大陸から龍の思想が入り、室生の岩山にできた大きな洞窟に龍が住み、この活動によって雨が降り、様々な願い事が成就すると信じられるようになる。龍の棲む洞窟は「^{りゅうけつ}龍穴」と呼ばれた。



網掛け部分は室生赤目青山国定公園の範囲

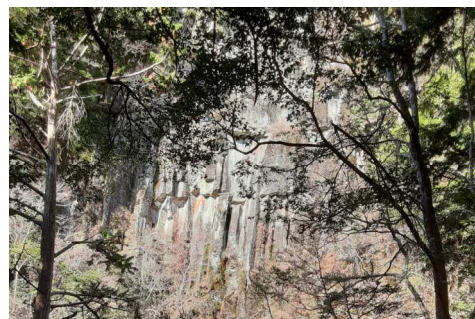
『日本紀略』(11 世紀後半から 12 世紀頃、作者不明)によると、弘仁 9 年 (819) 秋七月丙申 (十四日) の条に、「使を山城の貴布禰神社及び、大和国室生山の龍穴等の処に遣わして雨を祈る」

とあり、神社の存在は不明だが龍穴の存在は確認できる。

奈良時代の末期から平安時代にかけて、度々祈雨・止雨のための祈禱が行われ³⁰、靈験を顕した。この龍穴から南へ 600m の位置に鎮座しているのが「室生龍穴神社」で、『日本三代実録』(延喜元年完成/源能有^{よしあり}、藤原時平ほか)では「貞



吉祥龍穴



吉祥龍穴周辺では、火山から流れ出た溶岩がゆっくり冷え固まって規則正しい割れ目ができる「柱状節理」がみられる。

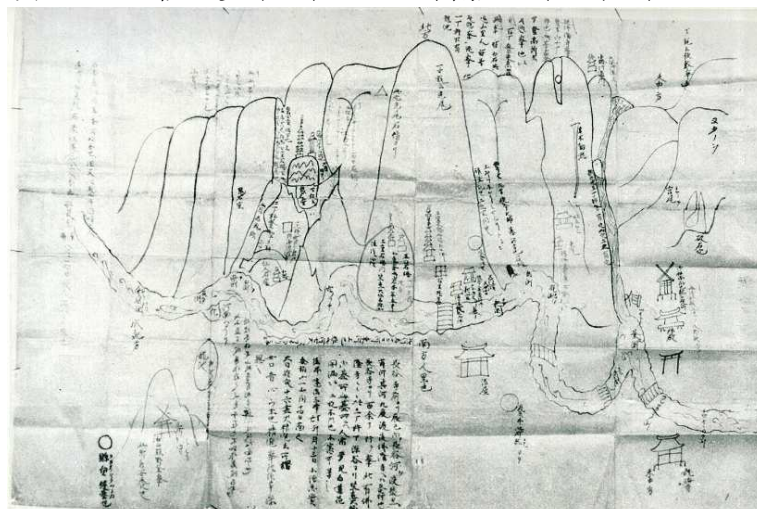
³⁰ 『日本紀略』では弘仁 8 年 (818) 「律師伝燈大法師修円を室生山に遣わして、雨を祈る」、弘仁 9 年 (819) 秋七月、『一山年分度者奏状』(承平 7 年 (937) 4 月 23 日) では天応元年 (781) ~ 承平 7 年 (937) まで 29 度、朝使、国宰 (国司のこと) 互いに相参登し祈雨・止雨の祈禱を竜神に致したとある。

観9年（868）八月十六日、大和国從五位下室生龍穴神社に正五位下が授けられる」とあり、延喜式『神名帳』では宇陀郡十七座のひとつに数えられていた。

たびたび龍穴神社で行われた祈雨等の儀式だが、派遣される使者は仏教の僧による法要であった。^{「べんいちゃんねんぶんとしゃそうじょう」}『一山年分度者奏状』（承平7年（937）4月23日）によると、大きな転機は宝龜年間（770～781）、東宮（皇太子、のちの桓武天皇）の病氣平癒を祈るため、浄行僧5人を室生山へ派遣し法要を行ったことである。東宮の病は快癒し、靈驗のあらたかさが示された。そののちに、国家の安泰を願い、興福寺大僧正賢璟^{けんきょう}が弟子の修円^{しゅうえん}とともに創建したのが「室生山寺（龍穴山寺）」である。やや遅れて、寺の東方に社殿が作られ、室生龍穴神社が創祀される。

創建当初の室生寺は、「興福寺別院室生山寺」といわれ、興福寺僧の研学の場、山岳修行の場であった³¹。このころ、中心堂宇として薬師堂（現金堂）が建立されたと考えられている。

中世、室生寺は興福寺の末寺だが真言宗を奉じていた。室生山寺から室生寺へと名称が定着し、11世紀前半に弥勒堂が建立され、鎌倉時代中期には真言堂（灌頂堂・悉地院・現本堂）および御影堂（大師堂）が建立され、真言密教化が進む。



「一山図」（正和3年（1314）写、金沢文庫所蔵）



現在の伽藍配置

金沢文庫が所蔵する「^{べんいちゃんず}一山図」（正和3年（1314）写）を見ると、金堂・弥勒堂・五重塔と奥の院が描かれ、東には龍穴神社社殿が記されている。川を挟んで向かいには、「南方人里也」とあり、詳細は不明だが既に集落が存在していたことがわかる。

³¹室生山寺には、宗派を超えて僧が続々と来山している。空海（真言宗の開祖）の高弟真泰、承和元年（834）に比叡山（天台宗の総本山）から円修と、法相・真言・天台の教行など、充実した山岳修行の場であった。

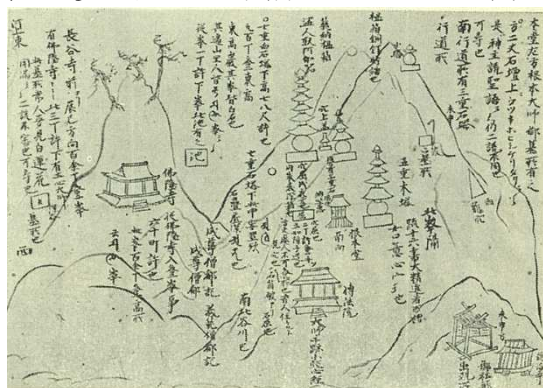
一方で本寺の興福寺は鎌倉時代後半から室町時代にかけて勢力が衰退し、室生寺支配が有名無実化しつつあった。更に南北朝期に入ると豪族となった沢・秋山両氏の台頭が、これに拍車をかけることとなる。

近世に入り、慶長9年(1604)から宇陀郡に入部した福島高晴が室生寺長老に興福寺以外の僧を据えようと圧力をかけたことから興福寺との間で紛争が生じた。興福寺が屈する形で解決したが、このときに長老となった真言僧建海が入寂したのちに紛争が再燃し、寺社奉行へ訴状が出される事態となる。訴訟では興福寺側の主張が全面的に認められたが、元禄7年(1694)真言僧隆光^{りゅうこう}が室生寺を拝領することとなり大きな転換期を迎える。

五代将軍徳川綱吉の母、桂昌院は隆光に深く帰依しており、堂塔の修理のために金2千両を寄進したほか、隆光の拝領以来、護国寺末寺としていた室生寺を、新義真言宗豊山派の一本寺(本山から独立した寺)として独立させたのである。さらに、高野山が女人禁制であることから「女人高野」の称を与え、高野山に立ち入れない女性の参詣を受け入れる寺として知名度を高め、室生寺とその周辺に大いに発展をもたらした。

女人高野室生寺は、伊勢街道沿いの名所としても知られるようになり、室生寺への参詣道は四方より四道が整えられた。西方は伊勢本街道の高井より赤埴の佛隆寺を経るもの、北方に青越道の大野より入るもの、東方は三本松の長瀬より入るもの、南は上田口より入るものがある。これらの道にはところどころに町石や道標が立ち、参詣者への便宜を図っていたことがうかがえる。

室生山一帯には四大門と呼ばれる寺院があり、東門・長楽寺(室生田口元角川)、西門・大野寺(室生大野)、北門・丈六寺(三重県名張市赤目町)、南門・佛隆寺となっている。主要ルートは、佛隆寺から室生寺へ向かう道であったとみられ、『一山図』(年代不明)(仁和寺(京都市)蔵)に佛隆寺が描かれるとともに、佛隆寺境内入口の手前に室生寺の方向を示す道標が置かれている。



『一山図』仁和寺(京都市)蔵



三本松長瀬にある大師堂と道標



伊勢街道から室生寺に向かう4つのルート



①三本松長瀬の道標



②大野の道標

女人高野室生寺は、参詣客でにぎわう平穏な近世を過ごしたが、明治初めの神仏分離・廃仏毀釈の大変革を受けて、龍穴神社と分離させられ一時衰退するに至った。

この衰退から室生寺を復興させたのは、明治12年(1879)に入住した丸山貫^{まるやまかん}長^{ちやう}住職である。広く浄財を集め、傷みの進んだ堂宇の修復を成し遂げた。

戦後、室生寺は女人高野のイメージと優美な堂宇や仏像の美を求めて多くの人で賑わうようになる。真言寺院として独立以来、豊山派の一本寺(末寺を持たない寺)として存在したが、昭和39年(1964)真言宗室生寺派を成立させ、その総本山となり更なる隆盛を見せた。元禄の火災で焼失した仁王門を昭和40年(1965)に再興し、威容が整えられた。

室生寺は幾度か大きな自然災害に見舞われている。昭和34年(1959)の伊勢湾台風で太鼓橋が流失、平成10年(1998)の台風7号では倒木により五重塔が大きく破損した。しかしその度に、全国から寄せられた浄財により再興、修復がなされてきた。現在も室生寺は、真言密教の作法に基づく祈りを日々捧げながら、深山幽谷に佇む優美な伽藍に四季折々の美を求め、或いは信仰のために訪れる人々を迎えている。

(2) 建造物

長い歴史を持つ室生寺の境内には様々な時期に建立された建造物があり、国宝や国の重要文化財に指定されている。これらの建造物を舞台に、日々のお勤めや行事等が行われている。

(表 室生寺の指定文化財一覧)

No.	区 分	指定年月日	名称	員数	年 代	備考
1	国宝	建造物	明治30年 12月28日 昭和26年 6月 9日	室生寺五重塔	1基	平安時代初期
2	国宝	建造物	明治34年 8月 2日 昭和27年 3月 29日	室生寺金堂	1棟	平安時代前期 庇 寛文12 (1672)
3	国宝	建造物	明治34年 8月 2日 昭和27年 3月 29日	室生寺本堂(灌頂堂) 附 厨子及び仏壇	1棟 1基(各)	鎌倉時代前期 延慶元(1308)
4	国宝	絵画	昭和53年 6月 15日 昭和54年 6月 6日	板絵著色伝帝釈天曼荼羅図(金堂来迎壁)	1面	平安時代
5	国宝	彫刻	明治34年 3月 27日 昭和27年 3月 29日	木造釈迦如来立像	1躯	平安時代
6	国宝	彫刻	明治34年 3月 27日 昭和27年 11月 22日	木造十一面観音立像	1躯	平安時代
7	国宝	彫刻	明治36年 4月 15日 昭和27年 11月 22日	木造釈迦如来坐像	1躯	平安時代
8	重要文化財	建造物	明治44年 4月 17日 昭和55年 12月 19日	室生寺御影堂 附 旧屋根板 旧裏甲 旧須弥壇床板 旧壁板 板札	1棟 7枚 1枚 1枚 1枚 1枚	鎌倉時代中期
9	重要文化財	建造物	昭和36年 3月 23日	室生寺納経塔 石造二重塔	1基	平安時代後期
10	重要文化財	建造物	昭和36年 3月 23日	室生寺五輪塔 石造五輪塔、小五輪塔2基、基壇付	1基	室町時代前期
11	重要文化財	建造物	昭和54年 2月 3日	室生寺弥勒堂	1棟	鎌倉時代前期 (室町前～中期改造)

【室生寺金堂】 国宝

仁王門を過ぎて「^{よろいざか}鎧坂」と呼ばれる石段を上ると右側正面に金堂が見えてくる。「^{むいさんぐ}一山図」(正和3年(1314)写)には根本本堂と記してある。

桁行5間、梁間5間、こけら葺、^{よせむねづくり}寄棟造で、壁以外は^{にぬ}丹塗りで^{ぬき}貫・^{なげし}長押を通し、^{れんじまど}連子窓を^は嵌め、軒は二重垂木。組物は^{だいとひじき}大斗肘木を用い、正面一間通りに^{すがるはふ}緋破風を付けてある。

この金堂は、奈良時代末期に造られたものを平安造営のときに天井を張り、江戸時代に礼堂を付加した建物で、山岳伽藍の金堂としては最古の遺構であるとして国宝に指定されている。

かつて堂内には、釈迦如来像(国宝)、文殊菩薩立像(重要文化財)、十一面観音菩薩立像(国宝)、薬師如来像(重要文化財)、地藏菩薩立像(重要文化財)、十二神将立像(重要文化財)が安置されていたが、令和3年(2021)に新設された宝物館に納められ、参拝者を迎えている。



室生寺金堂



金堂側面

【室生寺本堂】 国宝

^{かんじょうどう}灌頂堂とも呼ばれる。金堂から西北に階段を上ると傾斜地を背後に切石積の基壇があり、その上に桁行 5 間、梁間 5 間、入母屋造檜皮葺のお堂が建つ。

『建内記』所載の後伏見上皇諷誦文によって、延慶元年（1308）に供養されたことがわかる。本堂は大正 13 年（1924）年から大正 15 年（1926）にかけて解体修理が行われた。

正大師会、陀羅尼会など室生寺における主要な行事はここを会場とし、各種法要が厳かに執り行われる。国宝に指定されている。



室生寺本堂

【室生寺^{みえどう}御影堂（大師堂）】 重要文化財

室生山の最も高い場所にあり、南面して建つ。方三間、宝形造、板葺。屋根の路盤と宝珠が石で造られていて珍しい。鎌倉時代中期の建立とされ、重要文化財の指定を受けている。

室内には、弘法大師坐像が安置され、毎月 21 日の大師会、青葉祭の法要の時のみ開扉し、祭壇に供物が並ぶ。



御影堂

【室生寺位牌堂】

御影堂と向かい合って建つお堂。^{かけづくり}懸造で、桁行 5 間、梁間 3 間、木造、寄棟造、銅板葺。『寺院明細帳』（室生村/明治 24 年（1891））の境内見取図には現在と同じ位置に「常燈堂」の名称で同規模のよく似た外観の建物が描かれており、建物の柱などの部材は相応に古いことから、このころにはあったと推察できる。

大師会や青葉祭の法要の際には、大師堂を向いて僧が並び、拝殿のような形で使っている。



位牌堂

【室生寺^{ごまだう}護摩堂（五大堂）】

室生寺寺務所の東方にある。創立は不詳だが、『室生寺縁起』（著者・出版年不明）によれば、この道場

において毎日国家の太平と宝祚（^{ほうそ}皇位）の長遠を祈念したという。

宝永年中に桂昌院の発願により再建したが、安政4年（1857）に焼失、文久2年（1862）6月22日に上棟した（『室生村史』）と伝わる現在の堂は、方三間、入母屋造檜皮葺、切石積の基壇の上に建つ。『寺院明細帳』（室生村/明治24年（1891））の境内見取図には現在と同じ位置に「五大堂」の名称で同規模のよく似た外観の建物が描かれており、建物の柱などの部材は相応に古いことから、このころにはあったと推察できる。毎月28日の護摩供や初祈禱はここで行われる。



護摩堂



室生寺慶雲殿

【室生寺慶雲殿（客殿）】

室生川にかかる太鼓橋を渡り、正門をくぐって左手に建つ。桁行10間、梁間6間、木造、片側入母屋造、棧瓦葺。曝涼展の会場となるほか、法要のあとの会食や振る舞いの場としても利用している。

写真家の土門拳が昭和21年（1946）～昭和24年（1949）に撮影した室生寺境内の写真に写っていることから、このころには既に建っていたことがわかる。



土門拳「室生寺遠景（春）」
写真提供：土門拳記念館

【龍穴神社本殿】県指定文化財（建造物）

「一山図」（正和3年（1314））によると、「御社南向也竜王現所」と記してある。現在の社殿は、一間社春日造、檜皮葺、周囲には瑞垣を回している。棟札によると慶安5年（1652）春日若宮本殿（奈良市春日野町）として建てた社殿を寛文11年（1671）に当地へ移築したものである。本殿の約800m奥にある吉祥龍穴までが境内地で、この周辺は火山岩により形成された独特の地形を持つことから、聖域として信仰を集めていた。秋の例大祭では、鳥居前が終着点となっており、拝殿の前で獅子舞を舞う。



初祈禱後、ぜんざいの振る舞いを受ける地域の人



龍穴神社本殿

【室生下出集会所】

室生寺の太鼓橋から南側の集落に入り、西南に坂を上ると、少し広めの土地があり、道を挟んで向かいに集会所が建つ。

木造つし二階建、棧瓦葺、庇付で、棟の北側に煙出しを設けている。室生村が作成した家屋評価調書によると、調査を実施した昭和46年（1971）の時点で築35年を経た住宅と記録されている。

現在は、地域の集会に利用するほか、秋祭りでは午前中、最後に獅子舞を舞う場所となっている。獅子舞の一行はこの建物に上がり、昼休憩を取ったあと徒歩で移動し、午後は室生寺太鼓橋を起点に出発する。



室生下出集会所

【橋本屋旅館】

室生寺の太鼓橋 ^{たもと} 袂にある旅館。木造二階建、片側入母屋造、棧瓦葺。川の方に入母屋の妻を向け、出入口の庇にも2箇所の入母屋を設けている。

室生村が作成した家屋評価調書によると、本館部分の建築年代は不詳、昭和46年（1971）に新たに客室を増築している。本館も増築部分も、現在の規模や仕様は家屋評価調書の内容とほぼ変わらず、外装の部材は相応に古びている。

橋を渡ればすぐ室生寺境内に入ることができる好立地にあり、客室からは室生川越しに室生寺を眺めることができる。法事などの仕出しのほか、室生寺の参詣客が主に利用する。



橋本屋旅館 外観

(3) 活動

【龍穴神社秋祭り】

祭神は水の神である高たか龍おがみのかみ神、以前は旧暦9月15日に行われていたが、現在は月遅れの10月15日に近い日曜日に行われる。五穀豊穰と水の神への感謝を捧げるためのお祭りで、右写真のような隊列を組み、集落と対岸の室生寺境内を通り、龍穴神社まで決められた場所で獅子舞を舞ながら練り歩く。

室生の集落は5つの組にわかれ、それぞれに頭屋とうやがある。その総指揮をオクモンド、副総指揮をクモンドと呼び祭事を取り仕切る。このほか、14人の宮本衆が居り、各種神事に奉仕する。

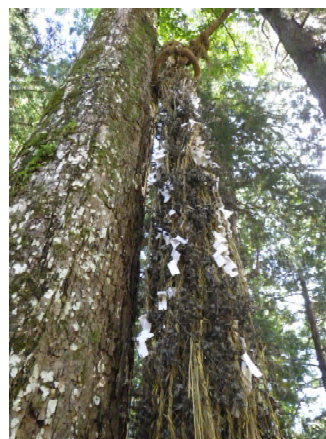
最初に8月1日に八朔座が行われ、地蔵院に宮本衆が集合、秋祭りの相談と終わって直会がある。10月9日には新米の藁と縄を使い、龍の形をな縋う。これを天神社の拝殿横にある大銀杏の木に吊り下げるため、運びあげる。鱗のかわりに紅葉の葉をへばりつけ、御幣をとところどころに垂れさせる。祭典を行い、木に縄をぶら下げたまま帰る。

秋祭りには宵宮があり、神社役員にて神社前の杉の木に勧請縄を吊り、祭典を行う。暗くなると子供太鼓台が出される。笛と太鼓の音と子供たちの掛け声で、賑やかに集落内をまわり、お祭り前夜を盛り上げる。

お祭り当日、オヘサシ（日の丸扇3本、木綿一反、白米三合、新穂米ひとつかみをぶら下げたもの）を立て、根本にお神酒と洗米を供えて祭る。頭屋宅は、右の写真のように注連縄が掛けられ、獅子舞が来るのを待つ。

朝から5箇所とうやの集会所で餅つきがあり、獅子舞は集会所（あるいは頭屋宅）を回り、餅つきをする横で、舞を舞う。このときに作られる神饌をスコウといい、笠餅御供・柿・粽・芋頭・押餅など古風で伝統的なものが作られる。

お渡りのルートは集落の最も高い所から下っていく。



大銀杏に吊るした龍
(令和4年12月撮影)



昭和40年(1965)頃の
頭屋宅前(写真提供:奥本氏)



1960年代の秋祭りの様子



右手前の人が持っているのが
オヘサシ。昭和戦後

①菅間出垣内集会所から出発して、②荷之出集会所、③西出会館、④広垣内集会所、最後に⑤下出集会所でお昼休憩に入る。

午後より、室生寺境内に入る。その際、龍穴神社総代が「7度半の使い」の所作をし、通常は閉門されている「赤門」が開けられ、そこで室生寺座主がお渡りの一行を出迎える³²。

獅子舞は天神社拝殿（金堂・弥勒堂の東）の前にて舞い、そのあとは太鼓橋を渡って旧参道を通り、龍穴神社の境内へ戻る。

神社境内に入るとお祓いをし、拝殿にて神事が行われる。そのあと、子供神楽、大人による獅子舞の奉納が行われ、御供まきをする。最後に抽選会があり、秋祭りのすべての行程が終わる。この祭は随所に古風な作法が残り、また神仏習合（日本古来の神と外来宗教である仏教を結び付けた信仰のこと）の祭礼としても特質がある。

【室生寺の行事】

室生寺では、毎月の祈禱、御影供、護摩供など、真言宗寺院としての行事が行われている。

【初祈禱】

1月6日13時から、護摩堂において初祈禱が行われる。その名の通り、新年最初に行われる法要で、『室生の民俗』（松本俊吉ほか/昭和41年（1966））では「室生寺の護摩堂で初祈禱にあたるハツゴマが、管長はじめ僧侶出仕のもとに厳修される」とあり、このころには既に行われていた行事である。檀信徒が集まり、導師を中心に加持祈禱が行われる。このとき、護摩焚きをするが、燃え盛る炎が龍の形に見えたと、いい一年を過ごすことができると言われている。

【春の彼岸会・大師会】

大師会は毎月21日に開催される弘法大師の月命日である。奈良県庁文書の『明細帳』（明治25年（1893）/室生村/）によると、「会式日 毎年一月廿一日 三月



拝殿前での獅子舞



護摩堂での初祈禱



春の彼岸会・大師会
階段を上る僧侶たち

³² 安政6年（1859）に護摩堂で火災があった際に室生の村人たちが消火活動に尽力したおかげで赤門が残った。その感謝の意を表するため、永代のお礼として秋祭りの日だけ、寺主が赤門を開扉し、その前に正座して出迎えるようになったと伝わる。

廿一日 七月廿一日」とあり、このころには行われていた行事である。3月21日10時から、奥の院に続く階段を僧侶が列をなして登り、位牌堂に上がると御影堂に向かい法要を行う。

続いて、位牌堂の正面に並び直し、彼岸会法要を行っている。

【正御影供養】

4月21日10時から本堂にて、弘法大師の命日の法要を行う。室生寺ではこの日が最も大きな行事と位置づけられ、お稚児さんや檀信徒が列をなして本堂へ入る。(2020年度以降はコロナ感染防止のため、お稚児さんの行列はとりやめとなった。)

『室生の民俗』(松本俊吉ほか/昭和41年(1966))によると「室生寺の大会式」とされており、当時は縁店(エンミセ)が境内に並び、多くの参詣客で賑わった。右の写真は、昭和45年(1970)の集合写真。

【青葉まつり】

6月15日 弘法大師の生誕を祝い、営む法要。奥の院の位牌堂から御影堂に向かい、法要を行う。

法要の際に散華した和紙製の蓮弁は、参加者に記念のお土産として渡される。

【^{だらにえ}陀羅尼会】

12月12日13時～、真言宗中興の祖、興教大師の命日に行う法要。本堂内陣で行われ、厨子の扉に興教大師の肖像画が掛けられ、声明、散華などが行われる。檀信徒は外陣に座り、法要の様子を見守る。

【月々の法要】

3日 弁財天供(弁天社) 弁天社に祭られた弁財天のための法要。

21日 弘法大師御影供(奥の院御影堂)、弘法大師



最初は御影堂を向いて法要を行う。



続いて位牌堂正面に向きを変えて法要を行う



正御影供、僧の入場



昭和45年(1970)のお稚児参りの様子。

出典/『桜井・宇陀の100年』(岩井宏實 監修/2006年)



陀羅尼会

の月命日の法要を行う。『室生の民俗』（松本俊吉ほか/昭和 41 年（1966））に「室生寺では同日（筆者注、一月二十一日）奥の院で初大師の御影供法要があり」との記述から、このころには行われている行事である。

24 日 地蔵供（地蔵堂）、室生川対岸の斜面中腹に建つ地蔵院にて、地蔵菩薩の法要を行う。『寺院明細帳』（室生村/明治 27 年（1894））によると「會式 毎年八月廿四日」と記載があり、このころには行われている行事である。

28 日 不動明王護摩供（護摩堂）、寺務所の横に建つ護摩堂にて、不動明王の護摩供を行う。奉納された護摩木を大檀具の上で焚くほか、屋外にて古札等を焚き上げる。



地蔵供



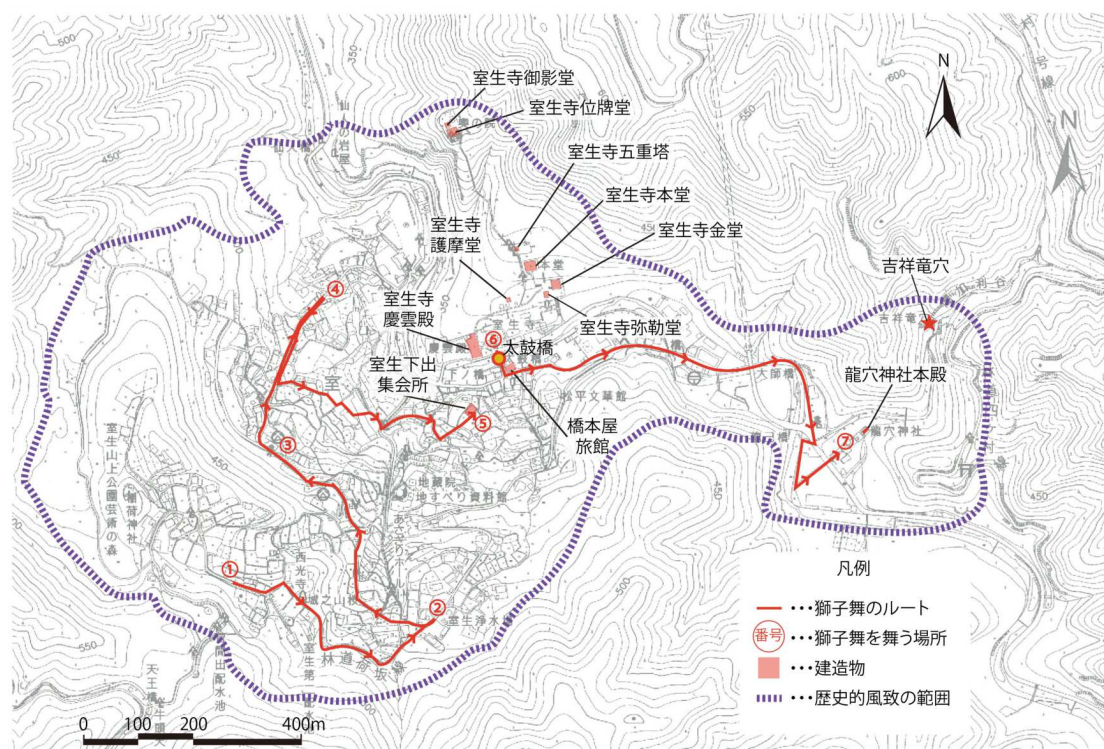
不動明王護摩供

(4) おわりに

火山活動により形成された特徴的な地形に神が宿ると考えられ、龍神の棲む聖なる場所とされた室生の吉祥龍穴。水を司る神として奈良時代末期より祈雨・止雨・病気平癒等の祈りが捧げられ、その願いに応え、霊験あらたかな場所として信仰を集めてきた。

龍穴と目と鼻の先の場所に、僧の山岳修行の場として開かれた室生寺では、長い歴史の中で真宗寺院としての行事が定着し、現在でも各種法要が続けられている。護法神として境内地が整えられた龍穴神社は、長く室生寺とともにあったが、神仏分離令以降は村社として室生の村人が守ってきた。今に受け継がれた秋祭りの様子から、分かれた寺と神社がかつては一体的なものであったことが読み取れる。

これら一連の活動と、建造物とが一体となり、室生寺周辺の歴史的風致を形成している。



室生寺周辺の行事にみる歴史的風致

参考文献

- 『古寺巡礼 奈良6 室生寺』(網代智等・河野裕子 著/平成22年(2010)10月)
- 『室生村史』(室生村史編集委員会 編/昭和41年(1966)2月)
- 『女人高野 室生寺のみ仏たち』(東京国立博物館・奈良国立博物館 編/平成11年(1999)7月)

コラム3 宇陀市内の地蔵盆

人々から親しみを込めて呼ばれる「お地蔵さん」とは地蔵菩薩のことで、仏教においては現世で仏が不在の間、六道（地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人道・天道）すべての世界に現れて人々を救う菩薩であるとされる。子孫繁栄や傷病の治癒成就など、様々な祈念が捧げられているが、特に子供を守る菩薩として信仰を集めてきた。

宇陀市内では、室生の地蔵院のように木彫の像を安置してお参りする事例もいくつかあるが、道祖神（集落の守り神）として集落の境目にお地蔵さんが鎮座している事例をよく見かける。その多くは石像で、覆い屋の下に安置され、朝と夕方に、線香やお水を供え、祈りを捧げる人の姿がある。

年に一度、地蔵盆が市内各地で開催され、お地蔵さんの前に子供が好きなお菓子・ジュース・果物が供えられ、法要が行われる。開催日は、殆どの集落は8月24日またはそれに近い休日だが染田は7月24日、関戸は9月15日に近い日曜日に行われる。



周囲を提灯で飾る



テントを張る



お参りに来る子供たちを待つ



お供えと笹を飾る



笹の飾り



寺院のお地蔵さんの地藏盆



五十軒の地藏菩薩



安産寺の地藏盆